

42606

教科書文庫

4
810
51-1926
20000 53181

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

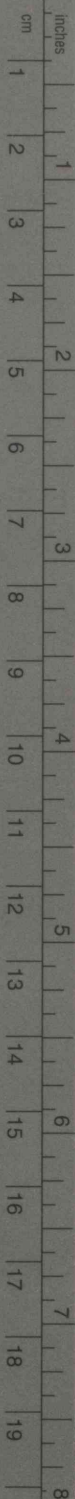


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Y019
資料室

編平彌田吉
文國範師
甲部一第
二卷



資料室

教科書文庫
4
810
51-1926
2000053181

01

375.9
Y019

資料室

編平彌田吉

師範國文
第一部用
卷二

京東

版藏館風光

広島大学図書

2000053181



吉田源平編

師範國文
第一部用
卷二

京東

光風館藏版

吉田真平

師範



第一

卷二

東京

大風館

師範國文第一部用卷二

目次

一	童謠	八	波則吉	一
二	祭	泉	鏡花	八
三	髻	夏	目漱石	四
四	田園雜興	大	町桂月	九
五	武藏野	國	木田獨步	四
六	利根川の秋曉	德	富健次郎	三
七	桶工	石	川雅望	三
八	シボラの國	大	山卯次郎	三

目次

一

九	本居翁の墓と家	芳賀 矢一	一〇	玉勝間二章	本居 宣長
	儒者			新説	
一一	本多重次	新井 白石	一二	詩三篇	
	笑と涙	野口 米次郎		ポール、フォルの不幸	堀口 大學
	荒川堤で	千家 元麿	一三	汽車	北原 白秋
			一四	順禮唄	近松 半二
			一五	遼東の月	小笠原 長生

一六	雪前雪後	幸田 露伴	一七	古今千遍	雨森 芳洲
一八	四季の月	石川 依平	一九	忘れ難き日	姉崎 嘲風
二〇	友に寄す	高山 樗牛	二一	勤王家の歌	
二二	杉浦重剛君を弔す	穂積 陳重	二三	梅	藤岡 作太郎
二四	鶯	島崎 藤村	二五	紐育倫敦巴里	鶴見 祐輔
二六	日本人	正木 不如丘	二七	鹽井川	十返舎 一久

二八	顏淵	安藤圓秀	一五
二九	虎	本山荻舟	二天
三〇	氷川清話	勝海舟	一七
三一	南洲遺訓	西郷南洲	一七
三二	西郷南洲論	尾崎行雄	一七

師範國文第一部用卷二

一 童謡

八波則吉

八波則吉
國文學者
第五高等學校教
授
福岡縣生

コップ
Cup

凡そ人が物を観るには、その観方に二通りあると思ひます。即ち物を物として観るのと、物を心あるものとして観るのと。例へば此のコップの水を、たゞ水として冷やかに観るのは常ですが、また吾々人間のやうに泣きもすれば笑ひもするものとして観ることもあります。前者を科學的態度とすれば、後者は文學的態度です。科學者は何處までも冷靜に、

水は酸素と水素の化合物で、其の割合は酸素の一容と水素の

二容、即ちH.Oである。

といふ風に説き、文學者は飽くまでも同情的に、

水。あたしは優しくつて溫和しくつてね、人間には親切ですねえ：井戸をかはいがつて頂戴ね、小川の音を聞いて下さいね。あたしいつも其處にゐますよ……

あなた方夕方にね、あの泉の傍に坐つてらつしやる時は——森の中には此處よかどつさりあるでしよ。——泉が話しようとしてゐること、聞いて下さいね……もうあたし何にも言へないんですよ……涙にむせて話せないんですよ……

徳利を御覽なされた時には、あたしを思ひ出して下さいね：あたし、それからね、甕の中にも、水罐の中にも、水溜りの中にも水管の中にも居るんですよ。(青い鳥) マーチレリッ

といった風に、人間と同じく、水に涙ながらの身の上話をさせます。子どもは總べて詩人です。お月様を見ては、

お月様いくつ、

十三七つ、

まだ年若いに、
紅鐵漿つけて、

お嫁入りなされ。

と歌ひ、螢を見ては、

螢來い〜、

そつちの水は苦いぞ。

こつちの水は甘いぞ。

と歌ひます。お正月になれば、東京附近では、

ボニエ
分區會日陰借七十五日行ノ休業
食器種々食物盛テ相支
及父母トモ樂ニ候モト

お正月がござつた。
何處までござつた。
神田までござつた。
何に乗つてござつた。
讓葉に乗つて、
ゆづりくゝござつた。
と歌つて歓迎し、石を起すに、北陸地方では、
石、石、起きろ。
地の下が焼けるはよ、く。
と歌つて起します。此くの如く、人間以外の動物、植物又は石や
水のやうな無生物、乃至益會やお正月の如き年中行事までを人
格化して、或は呼びかけ、或はお話させることを文學の上では擬

美學ニ美詞ヲ識列スル内字

人法と申します。人間になぞらへる方法といふ意味ですが、畢
竟自分の感情を是等の事物に移し入れることであつて、美學の
原理ともいふべき感情移入であります。
子ども——總べて詩人であると申しました子どもは、此の擬人
法、即ち感情移入に甚だ妙を得てゐるものです。
兒童作の童謠五六首を紹介します。——
星と月
月の近くでびかくと、
星のこしもとすわつてる。
山
山がせのびをして、
東京を見た。

入日

おてんとさんが
しやがんだ。

杉の木より

ちひさい。

赤とんぼ

生れたばかりの赤とんぼ、

母さん居ないよと泣いてゐた。

一本松

裏の小山の

一本松、

いゝつもひとりて

西條八十

詩人
明治二十五年東
京生

道灌山

東京市の北上野
公園の西に續く
岡
神田
東京市の中央神
田區

さびしくないか。

大人の童謡作家も、是等兒童の作に鑑みて、出来るだけ童心を現した童謡を作つてゐます。西條八十氏の「蟻」の如きが其の一例です。

蟻、蟻、寂しかろ。

はこべの葉つばに ついて來た

道灌山の 黒蟻を、

神田の通りで 放したら、

蟻、蟻、寂しかろ、

路が分らず、寂しかろ。

同情——吾々人間の最も美德と稱すべき同情は、實に感情移入の賜であります。(國語の講習)

泉鏡花

名は鏡太郎

小説家

明治六年加賀金

澤生

中六番町

東京市麴町區中

六番町

鏡花の家は同區

下六番町

山王様

近江國日吉神社

の祭神大山咋神

大三輪神をいふ

こゝは東京麴町

區永田町二丁目

の日枝神社をさ

猿田彦命

天孫降臨の時途

に御出迎をした

神鼻高く天狗の

如き形の面

二祭

泉鏡花

いまでも中六番町の魚屋へ行つて歸つた家内の話だが、其處の女房が負をして居る誕生を濟ましたばかりの嬰兒に、みいちゃんお祭は？ お祭は、と聞くと、小指の先ほどな、小さな鼻を撮んぢやあにこく、鼻を撮んぢやあにこくする。

山王様のお祭りの猿田彦命の面を覺えたのである。

それから、お獅子は？ みいちゃん、と聞くと、引掛けて居る絆纏の兩袖を引張つて、取つてはかぶり、取つてはかぶりしたさうである。 いや、お祭は嬉しいものだ。

——今日は梅雨が朝から降つて薄ら寒い……

會式

法會の儀式

轉じて特に十月

十三日日蓮上人

入寂をまつる會

式

祭の夜は、思出しても、何年にも、いつも暗いやうに思はれる。時候が丁度梅雨にかゝるから、雨の降らない年の、月ある頃でも、曇るのであらう。また、大通りの絹張の繪行燈、横町々々の紅い軒提灯も、祭の夜は闇の方がふさはしい。月の紅提灯は納涼になる。それから、空の冴えた萬燈は、霜のお會式を思はせる。

日中の暑さに、酒を浴びたり、血は煮える。御神輿かつぎは、人の氣競がもの凄い。五十人、八十人、百何人、ひとかたまりの若い衆の顔は、目が据り、色は血走り、唇は青くなつて、前向き、横向き、後向き。一つにてつちて、葡萄の房に一粒づゝ、目口鼻を描いたやうで、手足の筋は凌霄花の緋を欺く。

御神輿の柱の、飾の珊瑚がぱつと咲き、銀の鈴が鳴りすわつて、鳳



山王祭の圖

風の翼、鷄のとさかがさつと汗ばむと、彼方此方に揉む状は、團扇の風、手の波に、ゆらくと乗つて揺れ、すらりと大地を斜に流るゝかとするれば、千本の腕の帆柱に、つと軒の上へまつすぐに舞上る。
わつしよ、わつしよ、わつしよ。
もう此の時は、人が御神輿を擔ぐのではない、御神輿の方が、います靈と、もに、人の波を思ふまゝ、釣るのである。

山車
祭禮
飾り
人形
ドヨ車
飾り
カセル
車

踏躑

踏躑

御神輿は行きたい方へ行き、めぐりたい方へめぐる。殆ど人間業ではない。

揃の浴衣を始めとして、提灯の張替へをお出し置き下さい、へい、頂きに出ました——え、張替へをお届け申します。——軒の花を掛けますと、入りかはり立ちかはる二三日前から、もう町内は親類づきあひ。それもいゝ。てけてんく、はや獅子が舞ひあ

るく。
神前
春
獅子
舞
祭
屋
踊
屋

お神樂獅子踊屋臺、町々の山車の飾、つくりもの人形生花。造花は、櫻牡丹、藤躑躅。生花は、菖蒲、姫百合、青楓。
こゝに御神所と言ふのに、三寶を供へ、樽を据え、緋の毛氈に青竹の埒。高張提灯、弓張をおし重ね、大火鉢に火がくわんくと起

夏目漱石

名は金之助
英文學者
小説家
東京帝國大學文
科大學教授
東京朝日新聞記
者
東京生
大正五年歿
年五十

占リウラカタニ考ニテ、身ノエ
ギ山ヲ判ツルゾト

三髯

夏目漱石

學校を出た當時、小石川のある寺に下宿をしてゐた事がある。

其處の和尚は内職に身の上判断をやるのだ、薄暗い玄關の次の間に、算木と箆竹を見るのが常であつた。固より看板を懸けて



の表向な商賣でなかつた。せぬか、占を頼みに來るもののは、多くて日に四五人、少くない時はまるで箆竹を揉む音さへ聞えない夜もあつた。易斷に重きを置かない余は、固より斯の道に於て和尚と無縁の姿であつたから、ただ折々襖越しに和尚の、そりや當人の望み通りにした方が好う

がすな。などと云ふ縁談に關する助言を耳に狭む位なもので、面と向き合つては互に何も語らずに久しく過ぎた。

或時何かの序に、話がつい人相とか方位とか云ふ和尚の繩張内に摺込んだので、冗談半分「私の未來はどうでせう。」と聞いて見たら、和尚は眼を据えて余の顔をじつと眺めた後で、「大して悪い事もありませぬな。」と答へた。大して悪い事もないと云ふのは、大して好い事もないと云つたも同然で、即ち御前の運命は平凡だと宣告した様なものである。余は仕方がないから黙つてゐた。すると和尚が「貴方は親の死目には逢へませぬね。」と云つた。余は「さうですか。」と答へた。すると今度は「貴方は西へ」と行く相がある。」と云つた。余は又「さうですか。」と答へた。最後に和尚は「早く願の下へ髯をはやして、地面を買つて居宅を

御建てなさい。」と勧めた。余は「地面を買つて居宅を建て得る身分なら、何も君の所に厄介になつちや居ない。」と答へたかつた。けれども願の下の髻と、地面居宅とはどんな關係があるか知りたかつたので、それだけ一寸聞き返して見た。すると和尚は眞面目な顔をして「貴方の顔を半分に分けると、上の方が長くて、下の方が短か過ぎる。随つて落ち付かない。だから早く願髻を生やして上下の釣合を取る様にすれば、顔の居坐りがよくなつて動かなくなりませう。」と答へた。余は余の顔の雑作に向つて加へられた此の物理的もしくは美學的の批判が、優に余の未來の運命を支配するかの如く容易に説き去つた和尚を少し可笑しく感じた。さうして「成程」と答へた。

一年ならずして余は松山に行つた。それから又熊本に移つた。

松山
愛媛縣立松山中
學校教諭として

熊本
第五高等學校教
授として
倫敦
文部省留學生と
して

熊本から又倫敦に向つた。和尚の言つた通り西へくと赴いたのである。余の母は余の十三四の時に死んだ。其の時は同じ東京に居りながら、つい臨終の席にも侍らなかつた。父の死んだ電報を東京から受取つたのは、熊本に居る頃の事であつた。是で見ると、親の死目に逢へないと云つた和尚の言葉もどうかうか的中してゐる。唯願の髻に至つては其の時から今日に至る迄、寧日なく剃り續けに剃つてゐるから、地面と居宅が果して髻と共にわが手に入るかどうか未だに判然せず居た。

ところが修善寺で病氣をして寝付くや否や、頬がざらざらし始めた。それが五六日すると一本々に撮める様になつた。又しばらくすると頬から願が隙間なく隠れる様になつた。和尚の助言は十七八年振で始めて役に立ちさうな氣色に髻は延び

修善寺
伊豆國田方郡修
善寺温泉

て來た。妻は「いつそ御生やしなすつたら、いゝでせう。」と云つた。余も半分其の氣になつて、頻に其の邊を撫てまはしてゐた。ところが幾日となく洗ひも梳りもしない髪が、膏と垢で余の頭を埋め盡さうとするむさくるしさに堪へられなくなつて、或日床屋を呼んで、不十分ながら寝たまゝ頭に手を入れて顔に髮剃を當てた。其の時地面と居宅の持主たるべき資格を又奇麗に失つてしまつた。傍のものは「若くなつた〜。」と云つて頻に囃し立てた。獨り妻だけは「おや、すつかり剃つて御仕舞になつたんですか。」と云つて少し残り惜しさうな顔をした。妻は夫の病氣が本復した上にも、猶地面と居宅が欲しかつたのである。余と雖も、髻を落さなければ地面と居宅がきつと手に入ると保證されるならば、あの願は其の儘に保存して置いた筈である。

環堵蕭然
まはりうがきは
もの寂し

大町桂月

名は芳衛

文學者

高知縣生

大正十四年歿

年五十七

西郊

桂月の寓居は當時東京府豊多摩郡内藤新宿北裏町花園神社の傍にあつた

環堵蕭然

環堵蕭然不_レ蔽_二風日_一（晋書）

四 田園雜興

大町桂月

（漱石全集）

われ年來病軀をいだけり。我が志を伸さんには、先づ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地空氣新鮮にして、街上の塵埃到らず。乃ち居をこゝにト



大町あり、後に竹林あり。四顧たゞしぬ。一字の茅屋、前に葡萄棚木立を見て、人家を見ず。環堵蕭然たり。晉に我が心に適するのみならず、亦我が體に適す。

汽車の便をかりて都門よりかへり來れば、滿園の綠樹笑つて我

畏り敬とテ詭ルニト

畏

喜り忘中 或は云ふ

喪家の狗
鼻々若二喪家之
狗(史記)

を迎ふ。稚兒飛び來りてわが手の風呂敷包にぶらさがる。例として土産の菓子あらんことを期するなり。さるにてもわが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ恥かしけれ。

蒸暑き夏の夕、涼み臺を無花果樹の下に移して一家晚餐に團欒すれば、竹の葉戦ぎて涼氣自ら盤上に迸る。一盃の飯、母と分ち妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つなり。今一つ隣家に飼へる犬のいつも食時を違へず來りてかしまるあり。その主人近ごろ妻子を残して病死せり。喪家の狗の譬、思ひ出されてあはれなるまゝに、残肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨肴なきこと多し、馬鈴薯などを與ふるに、たゞ鼻先にかぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

おぼつかなげに「とゝゝ」と呼びて雞に餌を與ふることも亦小兒がなぐさみの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで集り來り、先を争うて食ふ。雄三羽、雌七羽ばかりあり、種類も一ならず。就中しやもの唯一羽最も慄悍なり。餌を貪ること最も甚だしく、近よるものゝ頭を嘴にてこづくさま、如何にもにくらしく、他の雞恐れて敢へて近よらず。されど最も大にして好き卵を産むものはこのしやもなり。

われ平生物累なきことを期す。身には惜しきものを帶びず、家にも惜しきものを置かず、身邊の物品すべて用を辨ずるを以て足れりとす。一室の中、粗末なる机と書物との外には、また他の物なし。興來りて筆執り、書を繙き、興盡きて横臥し、煙を吹く。雞、遠慮もなく座に上り來り、机上にたちて啼くことあり。護謨

百難心不動、千
苦氣益振。萬死
盡二天職。至誠
泣二鬼神。桂月

清正の猿

加藤清正の愛養
した猿が讀みさ
しの論語に筆で
塗抹したのを見
つけて「汝も亦
聖人の道に志が
あるか」といつ
たまふ叱りもし
なかつたといふ
話

履はきて庭に遊べる小兒いつの間にもやら履のまゝにて座に上り來ることもあり。されど雞上らば追ふべきものと心得て、おのれは履にて上り居りながら、兩手をひろげて雞を追出すもいとあどけなし。その末の子はまだろくに口もきけぬばかりの

百難心不動、千苦氣益振。萬死盡二天職。至誠泣二鬼神。桂月

桂月筆蹟

年頃なり。母の乳にあけば、をりく我が机邊に來る。われ坐すれば兒も

坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。あまり大人しきにふと心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹して居ることもあり。かはいや幼兒清正の猿と相距ること遠からず。

人同心下何

み子牙自然

アレン

念始終

古傳

秋終りより冬の初

園中兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蜒なり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば、たゞ嬉しきなり。慾もなし、名利の念もなし。自然に對すれば、始めはその愛すべきを覺え、終にはその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等か神祕の潛めるものゝ如し。而して小兒は人類の中にて最も自然に近きなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

樂しき我が家の團欒にも猶一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むこと前後僅々十餘年に過ぎず。近年我、膝下に侍して奉養することを得たるは一年中の小春日和の如きか。

親を思ふ

親思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何とさくらん(吉田松陰刑に就く時の歌)

廉頗

支那戰國時代の勇將

趙の將後に魏に仕へた趙で再び顔を用ひようとした時使者の前で飯一斗肉十斤を食べてまだ老衰しない元氣を示した

國木田獨歩

名は哲夫

文學者

千葉縣銚子町生

明治四十一年歿年三十八

然るにわが病弱の身はその小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣遣ひ、わが食少なきを心配す。「親を思ふ心にまさる親心」と詠じけん、世に子の上げかり親の心をいたましむるものなし。罪ふかきかな、抑不孝の子なるかな。昔廉頗老いてなほ用ひられんとして強ひて健啖せりとかや。それは功名故、われは親故に強ひて餐を加へ、久しく絶ち居たりし晝食さへもものするに至りぬ。食進むやうになりて嬉しとて母の喜ぶさま見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。(春草秋草)

五 武藏野

國木田獨歩

ト處々作源

獨特の路を思ふ

武藏野の風景情趣



國木田獨歩

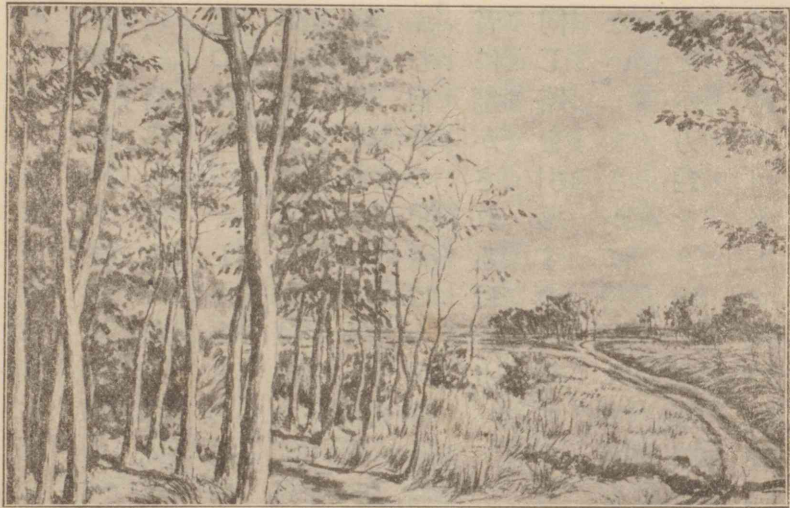
武藏野に散歩する人は路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美はたゞ其の縦横に通ずる數十條の路を當もなく歩くことによつて始めて獲られる。春夏、秋冬、朝晝夕、夜、月にも雪にも風にも霧にも霜にも雨にも時雨にも、たゞ此の路をぶらぶら歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと自分はしみじみ感じて居る。武藏野を除いて、日本に此の様な處が何處にあるか。林と野とが斯くもよく入亂れて、生活と自然とがこの様に密接し

て居る處が何處にあるか。武藏野にかゝる特殊の路のあるのは實に此の故である。されば君若し一の小徑を往き、忽ち三條に分れる處に出たなら、人に尋ねるに及ばない、君の杖を立て、其の倒れた方へ往きたまへ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到つてまた二つに分れたら、小さな路を擇んで見たまへ。或は其の路が君を妙な處に導く。それは林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少しばかりの空地があつて、其の横の方に女郎花などの咲いて居ることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いて居たら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見たまへ。忽ち林が盡きて君の前に見渡しの廣い野が開ける。足元から少しだけ下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つて居る。

萱原の先が畠で、畠の先に背の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つて居て、雲の色にまがひさうな連山が其の間に少しづつ見える。十月小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し萱原の方へ下りてゆけば、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れて居たのを發見する。水は青く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水のほとりには枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池のほとりの小徑を暫く往くとまた二つに分れる。右に往けば林、左に往けば坂。君は必ず坂をのぼるだらう。武藏野を散歩するに、兎角高い處高い處と擇びたくなるのは、自然廣い眺望を求めようとす

るからであるが、併し其の望は容易に達せられない。見おろす様な眺望は決して出て來ない。それは初めからあきらめた方がいゝ。

若し、何かの必要があつて路を尋ねたいとおもへば、畠の中に居る農夫にきゝたまへ。農夫が四十以上の人であつたなら、大聲をあげて尋ねて見たまへ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し若者であつたなら、帽を取つて慇懃に問ひたまへ。横柄に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖なのである。教へられた路を行くと路が又二つに分れる。教へてくれた方の路は餘りに小さくて少し變だと思つても其の通りに行きたまへ、突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいけぬ。其の時、農家で尋ねて



武 藏 野

見給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ。」とすげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると果して見覚えある往來なる程これが近路だなと思はず微笑をもらす。其の時始めて教へてくれた路の有難さが分るだらう。路は眞直で、兩側には十分に黄葉した林が四五町も續く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩むことの

樂しさ。右側の林の頂には夕照が鮮かにかゞやいて居る。折落葉の音がきこえるばかり、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影は見えず、誰にも遇はず。若しそれが木葉の落ちつくした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にかかささと音がする。林は奥まで見すかされて、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、時々あわたゞしく飛去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。

同じ路を引返すのは愚である。迷つた所が今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸りにも矢張凡その方角をきめて、別な路をあてもなく歩くがよい。さうすると思はず落日の美を見ることがある。日は富士の背に落ち

んとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群がる雲は黄金色に染つて、見るがうちに様々の形に變ずる。連山の頂は白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つて、終には暗澹たる雲のうちに没してしまふ。

日が落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れんとする。寒さが身に沁みる。其の時は路をいそぎたまへ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然また野に出る。君は其の時、

山は暮れて野は黄昏の薄かな。
の名句を思ひだすだらう。(武藏野)

山は暮れて
奥謝蕪村の句

唯々僕等
彼は唯々時

六 利根川の秋曉

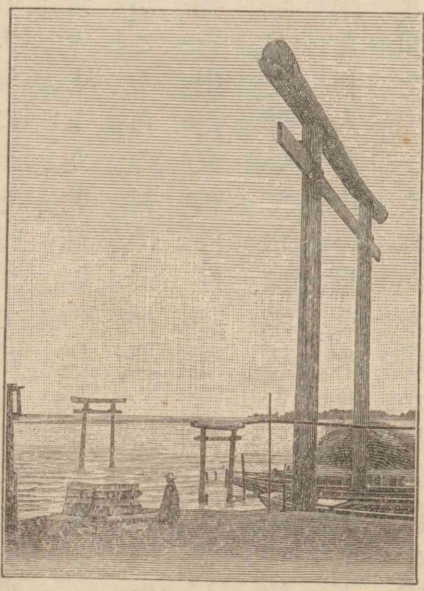
徳富健次郎

徳富健次郎
號は蘆花
文學者
明治元年肥後國
水俣町生
息栖
常陸國鹿島郡中
島村大字息栖
鹿島町の南二里
半
北浦
常陸國霞浦の東
にある湖其の水
は浪逆浦より利
根川に通ず
小見川
下總國香取郡小
見川町
チエルシー
英國倫敦市
の近郊
Chelsea
(1795—1881)
評論家
歴史家カー
ライルがこ
ゝに住んで
ゐた

先年の秋十一月の初旬ごろ、利根川の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。此處は利根川の本流が北浦の末流と落合ふ處で川幅が濶く、對岸の小見川までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼をさますと、櫓の音がぎい／＼と枕頭に聞える。翌日黎明に起きた。宿の者はまだ寝て居るので、そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で雞が勇ましく曉を告げると、餘程たつて、川むかふの小見川の方から、いかにも微かな雞の聲が聞えた。大河を隔て、呼びかはす此の雞聲は實によい。チエルシーの賢とコンコルドの哲とは實にかくの如く大西洋を隔て、呼び

コンコルド
北米合衆國
東部の市
評論家詩人
Emerson
がこゝに住
んでゐた
Concord
(1803—1882)

交したのであらう。自分の眼には曉は此の兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る様に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやり／＼水蒸氣が見えて來た。實に迅い。瞬をする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に満ちて居る。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少しうつろふ。忽ちきら／＼とまばゆき光が水にうつる。ふり返つて見



息栖神社

息栖の宮

於岐都説神社
鹿島神社の攝社

ると、朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。その梢を離れる鳥が一羽、朝日を負うて、さながら曉を告げ渡る神使の如く、凜とした朝の大氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。背後の茅舎から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につけて、くわつくわつと呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。水楊の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き、川に下りて川水を掬んで口を漱ぎ、顔を洗ひ、それから遙かに筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あゝ、實に好い拜殿である。」と自分分は思つた。(自然と人生)

筑波山

息栖の西北二十里霞浦のあなた平野の中にある

石川雅望

江戸の狂歌師で國學者宿屋飯盛六樹園文政十三年(一四九〇)歿年七十八

七桶工

石川雅望

都の端つ方に桶を作りて賣る男あり。秋の頃風烈しく吹出てよろほひたる家を打倒し、木の枝をさへ折り裂きなどす。檜皮屋の板の剝がれたるが空に飛びかふさま、さながら手向の神に幣參らする心地す。桶作り妻に向ひて、わが家財に富むべき時來ぬ。疾く神の御前に神酒、粿米奉りてよ。といふ。妻、野分烈しかりとて家の富むべき道理やはある。希有の事いふ男かな。といへば、女はおさましきまで物の心をたどり知らぬものなり。昔唐國には朱買臣といひし賢き人わが身今に成り出でなんといひけるをその妻の聞きも入れて、終に別れたるが、程なく夫はいみじき位を得たりけるを悔みつる例もぞある。すべて男の云へることを悔りざまにもてなさば、よき事はあらじ。といふ。

野分秋より冬まで吹り疾く
手向神
旅か道中の安全を祈りて手向
けの神

朱買臣

漢の武帝の頃の
人

猫間
猫の古語

妻さらば、かゝる風につけて、なでふよき幸があるといへば、夫がいはいはく、風荒く吹きぬれば砂埃起りて人の眼に入るぞかし。されば眼を病む人多く出で來なん。これ喜び祝ふべき事にこそ。といふに、妻は愈訝りて、人の眼を病むがいかで我が身の幸となる。と問へば、夫、深く物の心たどらざる人は、その由をえ知らじ。眼を煩ふ人多かれば、ようせずは眼潰れてかたはとなりぬべし。さるかたはになりなば、法師とこそなるべけれ。盲法師は近き世に唐國より渡りたる三絃といふものを弾きてなりはひとするなり。さらば三絃世の中に行はれぬべし。これ我が爲によき幸の來れるなり。といへば、妻、しか三絃の世にはやり行くと、身の幸となるべうもなし。といふ。夫、そも三絃は猫間の皮もて作るなり。三絃のはやり行かば、世にありとある猫まのかぎり

殺されて種盡きぬべし。これよき事の間近く來れるなり。といふを、なほ訝りて問へば、猫ま死に絶えなば、鼠時を得てはびこり、厨の棚、座敷を言はず、こゝらの鼠誇り騒ぎ、萬づの桶ども皆食ひ破り、或は板落して碎き損ひつべし。さらば、我が家に商物の數まさりて富み榮ゆべきものなるはや。と手打ちたゝきて躍り喜びけり。深きたどりある桶工にぞありける。(しみのすみか物語)

ハ シボラの國

大山卯次郎

西曆千五百三十七年の或夏の夕であつた、メキシコの町は赤い夕陽に其の日の暑さの名残を留め、家々の主婦達は未だ生温い山風にほつと一息しながら、夕餉の支度に忙しかつた。其處へ

シボラ
Cibola
大山卯次郎
前桑港總領事
メキシコ
Mexico

身に襤褸を纏ひ、見る影もなきまでに疲れ果てた五人の旅人が、歩むといふよりは足を曳きずりながら、何處からともなく顯れた。物見高い都人は忽ち「あれを見い、あれを見い。」と、人毎に町毎に言傳へ聞傳へ、およそ半時も経たぬ中に、それがもう町中の大評判となつた。そして或者は彼等が天から降つて來たやうにもいひ、或者はこれを地から湧いて來たやうにも疑つた。兎角する中に、彼等は或慈善家の情で夕餉の恵に預り、饑ゑた犬のやうにそれを一粒も残さずに食ひ上げて、安心と疲労との爲であらう、其のまゝ、其の家の廣い軒下で眠つてしまつた。明くる朝此の旅人等は再び朝餉を乞うた後、其の中のカベサ・デ・ヴァカといふ者から先づ口を切つた。

「有難うございました。御蔭で人間らしくなりました。實を

フロリダ
Florida 北米合衆國の
最東南端の州

申せば私共は始め西班牙の探検隊に加はり、一隻の小舟で實の國といふアメリカを指して本國を乗出しましたが、もう二三日でアメリカが見えるといふ頃、暴風に逢つて難船し、帆柱に縋つて綿のやうに疲れた體軀を波に打上げられたのがフロリダの海岸でした。其の間幾日か、つたか、どうして起つことが出來たか判らないが、初は何かを拾つては食ひ、野獸と喧嘩しては食をあさり、一里行けば人間が居るか、一日歩けば町でもあるかと辿り行く中に、それが毎日の仕事のやうになり、山を越え、川を渡り、西へくと歩いて來る中に、許多の土人達にも逢ひ、大きい都を幾つか過ぎ、或時は魔法使だと尊敬され、此の都に留れ、などと親切に言つてももらつたが、西へ往けば往くほど珍しい物が見られ、金銀に満ちた豊かな國々の多

コルテス
Cortés (1485-1547) 西班牙の軍人
メキシコの征服者

いのに驚きました。併し馴れては是を不思議ともせず、尙西へ西へと往く中、北の方にはこれ以上の黄金の國があり、而もそれが今まで見た類のものでは無いとの事でした。と、見たまゝ聞いたまゝを夢物語でもするやうに語り出した。これよりさき、コルテスといふ西班牙の勇士が千五百二十一年にメキシコを征服した頃から、誰言ふとなく、其の北方にシボラといふ財寶無限の國があつて、其處に黄金の都が七つあるといふ噂が立つた。其の噂によると、其の都の家の柱や瓦は勿論の事、路傍の砂や小石までがきら／＼光つて居る黄金で、子供達が鳥や獸を追ふにも金の礫ソテを投げつける、まるで黄金を小石と同じやうに思つてゐるとさへ傳へられて居た。そこでこの五人の旅人の話がかねての噂にぴつたり符合した

福音
人間に幸福を與へる訓言

ニザ
Marcos de Niza (1495-1542?) 伊太利人
フランシスコの僧侶
アリのゾナの発見者

からたまらない、今までの噂がもう事實であるかの如くにメキシコの町の人々の心を唆り上げた。それから間も無いこと、サンフランシスコの僧侶マルコス・デ・ニザといふ人は、黄金輝く異教の國に神の福音を傳へようと、曩の旅人の内の一人を案内者とし、大勢の探検隊を引連れ、シボラの黄金の國を指してメキシコの都を多數の人に見送られて出發した。それから二年の間は、梨の礫の音沙汰もなく、探検隊に加つた者の家族達はいふに及ばず、メキシコの人々は毎日々々北の空明るかれと祈りながら音信を待續けた。果ては、もう黄金は入らぬ、丈夫な體さへ歸つて來れば、と願ふやうになつた。さうする中、二年前一行の統領として立派な姿で出發したニザは、彼の五人の旅人が始めてメキシコに辿り來た時の窶れ姿で歸つて來

た。都の人達がどうしてこれをニザと思へよう。けれども矢張ニザだ。

「ニザが歸つた。」

「二人歸つた。」

「あゝニザは自分達を驚かさうとわざ／＼窶れた姿をして歸つたんだ。あの二年前の堂々たる一行は彼方の山陰に隠れてゐるのだ。そして多くの牛や馬に許多の黄金や珍しい話の數々を積んで來てゐるのだ。」

と誰やらが言ひ出した。

併し不幸にしてニザの窶れ姿は眞實窶れ姿であつた。彼は幾度か躊躇はしたが、遂に群集の迫るがまゝに、事實を語らぬわけには行かなかつた。ニザが心からなる報道はかうである。



シボラの國

「初めメキシコの都を出發してから、月數日數を重ね、野を越え山を越え、或時は草木もない砂原を炎暑に焼かれ、又或時は雨に悩み、雪に凍え、幾多の難行苦行を累ねた末、漸く黄金の都、黄金の城が目の前に近づいて來たといふ時、今まで柔順に案内してゐた多くの土人が突然多數を恃んで暴れ出し、一行のものを一人も残さず虐殺し、自分も既に命の危い所をやつとの事、逃れ出て、四五日といふものは何一つ食はず、山間の樹蔭に姿を匿

射倖心

偶然ノ利益ヲ得ル心

したが、自分一人無事で歸るのも心苦しいから、いつそ死なうかとも考へたけれども、此の始末をメキシコに傳へる事は吾が大事な任務であらう、都に着いてから死んでも遅くはないと決心し、せめて話の種に都の面影でも見て歸らうと、密かに山上から北の方を眺めると、青い木々の間から黄金の薨が太陽に照されてぴか／＼と輝き、其の眩さ美しさは、とても人間界とは思はれなかつた。だが土人等の話によると、其處から尙北にあたつてこれよりも更に立派な寶の國があるとの事ぢや。

今までは夫を返せ、兄を返せ、弟を、子をと口々に叫んでゐた群集は、何時の間にかニザの實見談に聞きとれてしまひ、頓てまた此の實話が國中の評判となり、非常に群衆の射倖心を刺戟した。

Colorado
アリゾナ
Arizona 北米合衆國の
メキシコに接す
ニウメキシコ
New Mexico
アリゾナ州の
東隣の州
カンサス
Kansas
コロラド州の
東隣の州
Cabrillo
カブリヨ

そこでメキシコ政府では公然探検して見る事となり、コロラドといふ士官に堂々たる探検隊を編成させ、歩騎兵其の他二百五十人の一隊を陸路より北に向はしめ、又更に一隻の大船を仕立て、海路から同じく北に向はしめたが、コロラドの一行は現今のアリゾナ・ニューメキシコとして知られた地方を通過し、遠くカンサスあたりまでも行つては見たが、ニザのいふ黄金の國、シボラの國は勿論、それに似寄りの影さへ見出す事が出来なかつた。又海路を進んだ一行は、今のカリフォルニア灣の入口であるコロラド河まで上り詰め、此處彼處と尋ねたが、これも同じく失敗し、空しく根據地に引揚げた。併しメキシコ政府は尙前途に深い望を屬し、ホルトガルの有名な航海家カブリヨに依頼して海路から其の探検を續けた結果、シボラの國は遂に見出し得

カリフォルニア
北米合衆國の
西海岸の州
California
にスコモこの
州

物事も移り
年月も過行く

サター

John Sutter

サクラメント

カリフォルニア
アの首府
Sacramento
サンフランシ
スコの東

アメリカ河
American River
と合す
ト市でサク
ラメント河

なかつたが、千五百四十二年に現今世界の人に羨まれるカリフ
オルニヤを見出したのである。
それにしても夢の國、黄金の國、シボラといふ不可解な言葉の國
は何處か、神ならぬ身の知る由もなく、夢から夢に移されて、果て
はこと問ふ人もなかつたが、其の後物替り星移り、カリフォルニ
ヤは西班牙の植民地となり、更にメキシコが獨立するに連れて
其の領土の一部と變じ、遂には米國の領土となつた。併し黄金
の國は夢見る人も無く、農事を營む移住民が東部から次第に入
込むやうになつた。是を目ざとく認めしたのはジョン・サターと
いふ商人で、此の人は米國政府とも多少關係のあつた軍人上り
の人であつたが、サクラメントに製粉所を設けようと思ひ立ち
其の準備のため、アメリカ河の畔のコロマといふ處に製材所を

合衆のやめ言葉

マーシャル
James
Marshall

隠れたるより
莫見乎隠、莫
顯乎微、故君子
慎其獨也。(中
庸)

建築する事となり、其の工事をゼームス・マーシャルといふ大工
に請負はせた。そこでマーシャルは先づ第一に水車場を造り、
いざ試運轉といふ前夜、水路掃除のためと川水を流して置いた
が、明くれば千八百四十八年一月十九日の朝、氣も晴れく、と起
上り、昇る旭を浴びながら水道の邊を逍遙してゐると、驚くべし
其の水底から光眩ゆき一の金塊を見出した。それから其の附
近を尋ね、流れの小石を拾ひ、洗つて見ると、どれもこれも金塊で
ある。マーシャルもサターも其の他の人足も皆狂氣のやうに
喜んだ。そして當分はこれを祕密にしよう、と固く言合せたが、
隠れたるより顯はるゝは無して、噂は忽ち四方に傳はつた。シ
ボラの國といふ言葉は忘れられても、此の話を聞いた人々は、鍬
を捨て、ペンを捨て、醫者も官吏も職工も、皆自分の仕事を捨て、

國玉又は大統領
書景

アメリカン河に馳せ集り、河畔をあさつては争つて金塊を採集した。其の年の秋には此の事實が東の方の新聞に掲載され、大統領の教書の内にも載せられるといふ有様で、此の黄金の評判は世界の隅々まで傳へられた。當時の金の採集高は、千八百四十八年に一千万弗、四十九年に四千万弗、それから凡そ十五箇年の間、毎年五千万弗から六千万弗の間であつた。幸運な人々の中には一箇五千弗位の金塊を掘當てた者もあつた。又場所によつては一エーカーの地から百萬弗の割合で採金された處も尠なくない。

嗚呼シボラの國、七つの黄金の都、此の話は遂に夢ではなかつた、噂ではなかつた。一攫千金の夢見る多くの人は、或は數千哩の大陸を横斷し、或は南米を廻り、或はパナマを通り、有らゆる危険

本居翁
宣長
國學四大人の一人
伊勢松坂生
享和元年(一八一〇)
歿
年七十二

芳賀矢一
國文學者
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
文學博士
慶應三年(一八五七)
越前福井生
妙樂寺
伊勢國飯南郡花岡村大字山室にある
松坂町の西南一里餘

を冒してカリフォルニアに集つたが、千八百四十九年中の移住者、それは俗に四十九士と呼ばれてゐる新來者だけでも八萬以上に達したとさへ謂はれてゐる。かくてサクラメントを中心に、多くの都市や村落が發達して、黄金の花咲く今日のカリフォルニアを作り出したのである。(太平洋の彼岸)

九 本居翁の墓と家

芳賀矢一

松・杉椎などで小暗い路を四五町も上つた處に淨土宗の寺がある。妙樂寺といつて、本居翁には深い關係のある寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎ、六七町も上ると古い木の鳥居が有つて十數段の石磴の上二三十坪位が平地になつて

大人は學者、師匠、貴人ニ對スル尊稱

公明リ老人ニ對スル
尊者ノ稱

師範國文第一部用卷二

吾

平田篤胤
國學者出羽秋田
生 天保十四年(三三)
三 歿 年六十八

居る。其の中央の小高い土盛が即ち翁の墓である。上に櫻の樹が一本。「本居宣長奥墓」と題した墓石がある。翁の墓の左手には、平田篤胤大人のなきがらはいづくの土になりぬとも、

魂はおきなのもとにゆかなん。

といふ歌を鐫りつけた圓い石が建て、ある。篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたことは無い、而も數多の門弟子の中で獨り翁の側に侍つて居られるのは、大人にとつては嘸かし満足のことであらうと思ふ。此の墓所は彼の妙樂寺の所有地であつたのを翁が懇請して、生前に選定して置かれたのである。其の承諾を喜んで、任僧に贈られた手紙は今尙同寺に珍藏して居る。

山室に千年の春の宿しめて、

風に知られぬ花をこそ見め。

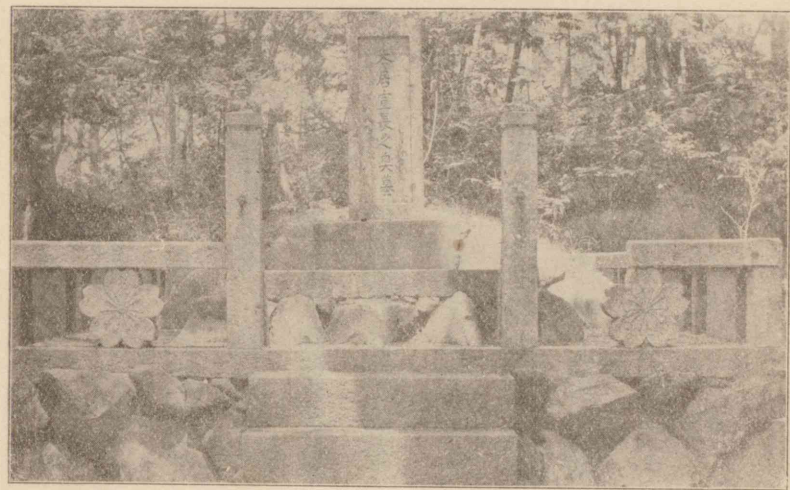
と詠まれたのは此の時である。二十年來一日として翁の書物を讀まぬ事の無い後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいたのだから、感慨は眞に無量であつた。

百年の世は隔つれど、教へ子に

數まへませとをがみ額づく。

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つて居るのであらう、其の著書の卓絶な學術上の價值と偉大な感化力とは未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程大なるものは無い。

此の墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類が無い。青



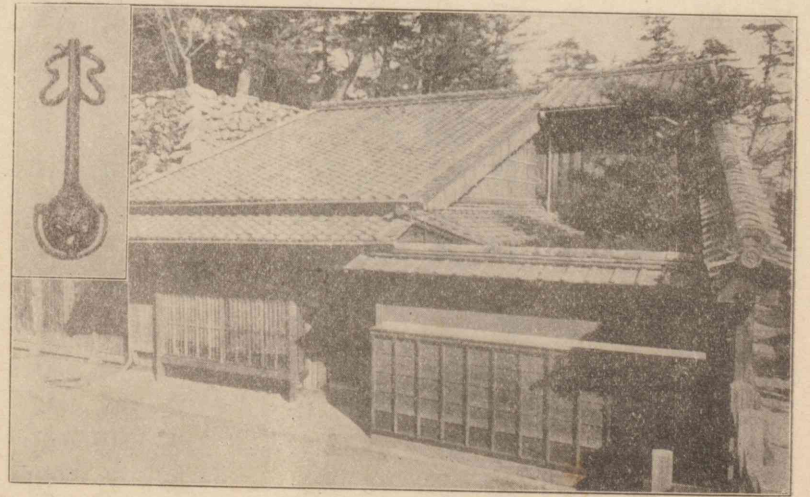
本居宣長墓

青とした伊勢の海を見はるかして、志摩三河尾張等の崎々山、近くは松坂の町を眼下に見る。「富士の山もいつもは丁度あのあたりに見える。」と案内の男は指さした。千古に卓越した學者の奥城として、誠にふさはしい場所である。妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、参拜名簿に記入などする。此處の眺望も誠に美しい。元來本居家の檀那寺で翁

も折々此處に來られた事がある。今日は住僧が不在で、寺男が一人留守居をして居たが、いざ歸らうとすると、その男も居ない。車夫に聞けば、今在所まで往つて來るといつて出掛けたといふ。さながらに太古の民である。

松坂へ歸つて、城跡の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅が其の儘に保存されて居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿、遺愛の品、醫業用の藥箱なども陳列されて居る。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學人をして覺えず襟を正さしめる。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞があるといふので、保存會でこの舊城址の一角へ移したのである。併し庭の樹木置石まで一切舊態を存するやう苦心したといふことで、臺所の竈も井も便所も本の儘

の形に残つて居る。下が引出になつて居る小さい楷子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繋がれて懸つて居る。尤も是は摸造品で、本品は陳列庫に在る。さてもこの書齋こそ翁が一切の著述の製作せられた場所、此の四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓からさし込む夕日は、嚙堪へ難か



本居宣長舊宅鈴屋及遺愛の鈴

豁然、
明々たるコト。

山室山神社 本居宣長を祭る	Panorama パノラマ	Schiller (1751-1805) 獨逸の詩人 戯曲家 歴史家	シルレル	Goethe (1749-1832) 獨逸の詩人 戯曲家 評論家	ゲーテ フリス	Weimar. ゲイテヤシルレルの住つてゐた地 獨逸のアゼン	ワイマール
------------------	------------------	--	------	--	------------	--------------------------------------	-------

つたらうと思はれて、此の質素な家居の様が愈、翁の人格を大ならしめる。獨逸のワイマールでゲーテヤシルレルの舊宅を見た時にも、其の偉大な事業と其の質朴な家居の有様との對比を面白く感じたが、此の鈴屋の遺蹟には一層感を深うした。此の公園は四望豁然、パノラマを見るやうであるが、翁の遺蹟を移して更に崇高の趣を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇である。松坂町民の誇は翁の遺蹟に越したものはあるまい。城の大手門を出て數十歩、縣社山室山神社がある。社殿や瑞籬が神宮風の様式であるのは一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさ、此のあたり櫻が幾本ともなく返り咲をして居る。案内人の話、先年東郷大將の來られた時も返り咲を見られて、流石に本居翁の郷土だけあつて、櫻は一年中咲くのだらう。といはれ

たといふことである。(筆のまに〜)

一〇 玉勝間二章

本居宣長

儒者

儒者に皇國のことを問ふには、知らずと言ひて恥とせず、から國

と云ふは、やももつて人さう

本の事を問ふに、知らず

しきしまのやま
と心を人とは
朝日にほふ山
ざくらばな
宣長

わりのやうにほふさうさうさう

といふをばいたく恥
と思ひて知らぬ事を

宣長

も知り顔にいひ紛ら

はす。こは萬づを漢めかさんとするあまりに、その身をも漢人
めかして、皇國をばよその國のごともてなさんとするなるべし。

めりさるりしん

されどなほ漢人にはあらず皇國人なるに、儒者とあらん者の、己
が國の事知らずであるべきわざかは。但し皇國の人に對ひては
さあらんも漢人めきてよかんめれども、もし漢國人の問ひたらん
には、我はそなたの國の事はよく知れども、わが國の事は知らず
とは、さすがにえいひたらじをや。もしさもいひたらんには、己
が國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか他の國の事をば知る
べきとて、手をうちていたく笑ひぬべし。(玉勝間)

新説

近き世學問の道開けて、大方萬づのとりまかなひさとかかしこ
くなりぬるから、とり〜に新なる説を出す人多く、その説よろ
しければ世にもて囃さるゝによりて、なべての學者未だよくも
とゝのはぬ程より、われ劣らじとよに異なる珍しき説を出して、

取調

研究整理

押し張る

人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。その中には、随分によろしき事もまれには出てくめれど、大方いまだしき學者の心はやりて言ひいづることは、たゞ人にまさらん勝たんの心にて、輕々しくまへしりへもよくも考へ合はさず、思ひよれるまゝに打出づる故に、多くはなか／＼なるいみじきひがごとのみなり。すべて新なる説を出すは、いと大事なり。幾度もかへさひ思ひて、よく確かなる據をとらへ、何處までもゆきとほりて、違ふ所なく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、程經て後に今一度よく思へば、なほわろかりけりと、我ながらに思ひならるゝ事の多きぞがし。

(玉勝間)

本多重次

徳川氏の世臣
勇猛剛直世に鬼
作左衛門といふ
文祿五年(三三三)
歿

新井白石

名は君美
漢學者
政治家
享保十年(三六五)
卒
年六十九

天正十二年

(三四五)
秀吉關白となり
家康駿府城を修
築した年
家康時に四十四
歳
重次は六十一歳

二 本多重次

新井白石

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出來て既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて御跡の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまでその程々に從ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣く／＼申しけるは、殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔此の病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし」と申す。「諸醫既に手を束ね家康亦死を決す。この上醫療其の詮なし。且は命を惜むに似たり。」とて用ひ給はず。

歿
ト
賴
ハ
家
康
ヲ
テ
詮
ナ
シ
リ
ト
申
ス

重次大いに怒つて、斯程大事の腫物軽々しく思召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又良醫して治し参らせんとするをも用ひ給はず、失せたまはんこと、御心がらとは言ひながらあつたらしき命かな。諸醫、術盡きぬと申す上は、彼争でか治し参らすべき。年老いたる重次が御跡にさがつての御供叶ふべからず。さらば御先へ参らん。とて御前を罷り出づ。徳川殿大いに驚かせ給ひ、あれ止めよ。と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引留め、仰せらるべき旨あらせられ候。といふ。重次大いに聲を怒らかして、最期の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿ばらの止めやうや。と罵つて出でんとす。
「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、げにさも候。とて御前

にまゐる。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死し果てぬに、縦ひ家康が命を終るとも、汝が世に在らんを頼にこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして一日も世に残りて若き者ども掟して、我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。と仰せければ、いや、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供其の詮なし。重次、若年の昔より此處彼處の軍に従ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに餘つて、世に交らんこと叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くならせ給

御掣
去年嫁した家康
の女督子の夫北
條氏直

ひなば他人までも候まじ、まづ御掣の北條殿、我が國々を取らんとし給はん、に若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち別れて氣後れしはかくしき矢の一筋をも射出すこと叶ふべからず。當家滅されんこと亦踵を回らすべからず。重次それまで存へて、あの年よつたるかたはものは徳川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なればかく世に恥をさらすらん。と後指さ、れん事、老の恥何事かこれに過ぎ候べき。此の頃までも武田の家の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿におくれ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果もあさましきによつて、御先に死することにて候。と申す。

武田
勝頼

「汝が言ふ所、ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生残つて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や。」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかで又仰をや背くべき。と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。

醫師やがて參つて、御灸治宜しかるべし。と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛覺えさせ給はねば、艾を増加ふること多くして後、聊か痛ませ給ふ由、仰せければ、御薬をつけて參らせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜半ばに、御腫物潰れて、膿水、血、夥しう流れ出で、御惱たちどころに輕ませたまへば、重次は嬉し泣に聲を限に泣く。御前伺候の人々も感涙を共に流しけり。(藩翰譜)

野口米次郎

詩人

英詩人

慶應大學教授

明治八年愛知縣

津島町生

二三 詩三篇

笑と涙

野口米次郎

四つの子供が冷い廊下を駆け、

途中でばたと横に倒れる。

顔を擧めて泣出す途端に、

庭に咲いてゐる菊を硝子戸越しに見る。

泣顔が急に笑顔と變り。

「お父さん、綺麗な花が咲いて、よ。」といふ。

私は思ふ……神様が人間に植ゑつけになる涙の種も笑の

種も、

種には何の相違が無い、詰り一つの種から異つた花が二つ

咲くのだ。

個性、個性、個性

神様の趣旨を忘れない子供だけが、(あゝ、子供は尊い。)

笑を涙とも、涙を笑とも即座に變へて見せる祕密を握つて

ゐる。

それが段々年を取るに従つて(どうでせう!)人間は涙と笑

を、

箇々別々、獨立的に培養してしまつて、神様の御趣意に忤り

ながら、

自分では個性の生長だなどといつて平氣で居ります、

變通自在な人間天賦の美質を不具ものにして居ります、

私は私の子供に向つて深く感謝する……

「お前は今日お父さんに偉い拾物をさせてくれました。」

(ヨネノグチ代表詩)

ポールフォール
 (1872—) 佛國の現代の
 象徴派
 堀口大學
 詩人
 明治二十五年東
 京生

ポール、フォールの不幸

堀口大學

詩王のポール、フォールの不幸は
 詩より他に何も書けぬ事だ。
 詩より他の形でものを感じ得ぬことだ。
 多分詩王の心にふれると、
 世界の凡てが詩になつて了ふのだらう。
 それは不幸に相違ない。
 しかし幸な不幸だ。
 それでこそこの詩人の王様は
 貧乏しながら詩を作り、
 詩を作つては貧乏してござる。

Opéra Comique
 オペラコミク
 オペラの喜劇役
 者

王様
 1. 自ら信ズルユトニ
 2. 自ら屬スル領
 = 抱_ル握_ルスル
 3. 何物モ操守
 ラ僥_ニ侵_ル能_ハズ

これで世間の馬鹿者は
 オペラコミクの王様とまちがへる。
 しかし仕方もないことだ。

あの開化した佛蘭西でも、
 人民どもには詩はわからない。
 詩は賣れぬ、詩は金にならぬ。
 記事や小説は
 何分大した金になると云ふに、
 しかし仕方もないことだ。

けれども詩王のポール、フォールは、

いくら本屋が頼んでも、
いくら友人が勧めても、
いくら妻君の帽子がなくなつても、
いくら自分のお腹がすいて來ても、
記事や小説は決して書きませぬ。
鶯が何でカナリヤのまねをしようぞ！
ポール、フォルは詩人でござる。
そして寝ても起きても、
貧乏を種にして詩を作り、
買手のない詩集を
年に四冊も五冊も出す。

かうして一九一九年の二月には
バラ、フランセーズの二十五冊目が出た次第！
彼の貧乏も今後十年ほど
詩王の才能を殺し得ぬとしたならば、
詩王の詩集の数は五十冊を超すであらう。
詩王のポール、フォルは
世界中の王様のうちで
一番本當な王様だ。
そして一番貧乏な王様だ。
貧乏な乞食よりも

なほ貧乏な王様だ。
そして幸福な王様よりも
なほ幸福な王様だ。

詩王のポール、フォルの幸は
詩より他に何も書けぬ事だ。(遠き薔薇)

荒川堤で

千家元磨

今日も自分は
友達をつれて
こゝへ来た。
こゝ荒川の堤防の上へ。
青い芝の上には

荒川

秩父山から出て
東京灣に入る川
東京市に入つて
隅田川といふ

千家元磨

詩人

明治二十一年東
京生

簇生
ウツガリ生
ル

優しい野菊が咲きさかつてゐる。
自分はそこに腰かけて日に温もりながら、
眼下に展開するはてしもない大きな風景を
貪るやうに眺めて酔つてゐる。
こゝへ来ると自分は夕方になるのも忘れてしまふ。
太陽がよほど傾いて
うすら寒くなつてやつと歸る支度をする。
太陽が盛に照つてゐれば、
自分はこゝで恍惚として現世を忘れてゐる。
薄と霞の簇生した中を
大きな河は美しい色を湛へて悠々と流れてゆく。
たまに白帆が遠い夢の國からでも来るやうに眞青な水の

上に、

水の底から咲いたやうに浮んで来る。

自分は驚く、

白帆は永遠の感じがする、

静かに滑つて消えてゆく。

餘りに静かで、この世のものとは思へない、

すぐ眼の下の白いよく乾いた道は

渡し場へ通じてゐる。

そこには一本の柳があり、

小さな小屋がある。

渡し場は美しい。

豆位の人や馬が始終往來して絶えない。

自分は高い處から見下して微笑してゐる。

赤い大鐵橋の向ふには、

遠い山脈が雪の間から

もの凄く現れてゐる。

雲のない日は青々として優美に見える。

鐵橋の上を汽車がはしつてゆく。

玩具の汽車のやうに小さく見える。

凡て、自分の眼前に散在する凡てのものが、

何年も何年もさうしてあつて、

大自然の中に生活するやうな感じがする。(日本詩集)

北原白秋

名は隆吉

詩人

歌人

明治十八年福岡

縣柳河町生

一三 汽車

北原白秋

私のところの男の子は、數へ年のまだ三歳であるが、この子が汽車を崇拜することは全く絶對的と云つていい。汽車は父よりも母よりも偉いと思つてゐるのだから、どうにも驚く。

考へると、汽車は常に童子の憧憬物になつてゐる。文明的で、而も冒險的大英雄のやうに、私の幼時も驚かされてゐた。少なくとも人力以上の何物かであるやうに見えた。あの眞つ黒い怪物が大きな兩つの眼玉を輝かして、轟々と黒い煙を吐きながら、驀進して來るのを見ると、私たち童子は全く胸がわく／＼した。「バンザイ」だつた。

まだ、私が母に抱かれてゐた頃、母の里への往き還りに、私は始めて人力車の上から汽車といふものを見た。その時の驚と喜と

母の里

熊本縣南關町

Signal シグナル

不鬼、議、テ、其、理、申、説、明、し、得、
ラ、レ、ル、ニ、様、ナ、ク、

はその後の何に對するよりも甚大なものであつた。山手の母の里へ往くには五里の平原の道を人力車で半日は揺られなければならなかつたが、その中ほどに鐵道の踏切があつて、白と赤とのシグナルが、かたりつと上つたり下つたりしてゐた。次の宿場の出はづれに差ししかゝる嬉しさは、いまだに忘れられない。其處で人力車を乗換へるのであつたが、彼是してゐるうちに、いつもあの汽車が堂々とやつて來た。あの汽車を見る喜の爲に、私はいつも母の里へ往くことを一年中の楽しみにしてゐた。やゝ長じてからは、遠足などの度にそれこそ正しい意味の最敬礼をした。時とすると、何かそのどえらい奇蹟的怪力に對して、子供らしい反抗心を抱かずにはたゞ見てゐられないやうな氣もした。で、さうした時には私たち童子の群は、わざと鐵橋を抜

スコット
The Lady of the Lake
湖上の美人
Sir Walter Scott (1771-1832)
家 英國の小説

け駈けて見たり、汽車の面前に思ひきり立塞がつて雙手を擴げて見たり躍つて見たりしたが、とてもかなはないことには、いかないつても慌てふために崖下や田圃の中へと、ころ／＼すつとんと顛落しないことはなかつたのである。

汽車の乗客としての光榮に始めて浴したのは、私の十五の時であつたが、その時の嬉しさといふものはなかつた。私は顔が眞赤になり、激しく動悸し、自分の占むべき座席さへ見出し得なかつた。それからやゝ動悸がをさまると、何か自分が一かどの大人にでもなかつたかのやうな矜を感じて、讀めもせぬスコットの「湖上の美人」などを繙いたものだ。どうせ讀めないもので、それも棚に載せると、今度は愈はじめから眺めたかつた外の景色を凝視にかゝつた。硝子扉を上げ下げすることさへおぼ／＼と遠

對象「自動車」
有頂天「好いこと」
ラ顔「クワイコト」
軌「中」
レテ「他」

カダンス
音調
Cadence
リズム
韻律
Rhythm
バルコン
露臺
張出縁
Balcony

慮したり、はにかんだりしたものだ。筑紫の大平野を汽車は疾走するのであつた。近い森と遠い山とが、その大きな圓盤の上を蜿蜒として旋轉するのである。見る物こと／＼くが驚異の對象で、清新で、爽快で、私を有頂天にせずにはおかなかつた。考へると、その後に處女詩集が出版された時の感謝と羞恥と喜悅とが、丁度あつたものであつたらう。

うちの子は、その初は汽車と電車との區別すらつかかなかつたやうだつたが、二三度上京してゐるうちに、すっかり汽車の音調や進行の韻律まで耳にとめてしまつた。もちろん、機關車や貨物列車の見わけぐらゐはとうの以前に知つて了つてゐた。で、露臺から斜丘の下を走りゆく汽車の音や藪越しに息してゆく白い油煙を見るやいなや、それこそ氣ちがひのやうに騒ぎたてる

Girder
ガイド

のである。

「テイチャバへ行かう。テイチャバへ行かう。」

日に三四度は泣喚くので、仕方なしに時たま下のガイドまで女中がおぶつて出る。歸りには反つ繰りかへつてどうにも手におへないので、どうかすると驛まで行つて、日が暮れて電車で歸つて來ることがある。山の上の生活はその子の父母にはいかにも閑寂であるが、生長力の旺盛なこの幼児にはとても堪へられない何物かあるにちがひない。

大人たちからの土産も、この子には汽車が最も喜ばれる。赤や青やの大小數かぎりもない汽車がかうして喜ばれると共に、片端からまたぶち壊されてゆく。繪本も汽車や電車や自動車のついた物に限られてゐる。鼠の娘が紅い襷をして餅を搗いて

ゐるのや、目鼻のある紅い太陽がにこ／＼笑つてゐる畫などは少しも喜ばれない。

さて、この子は、夜の枕もとにもこれらの汽車の玩具を寝かして、自分も寝なければ承知しない。寐言にまで、パンパン。サンドウィッチ。と叫び出す。朝は早くから家の前の小椅子に腰をかけて、その父のやうに新聞の配達を待つてゐる。來ると、すぐに汽車の寫眞を探す。無ければ廣告の自動車の畫でとにかく満足する。三歳の子から待たれる朝々の東京の新聞は、何といふすばらしい新鮮な訪客であらう。それが議會の會期中などは殊に喜ばれるのだ。そら、そこらの玄關には自動車が甲蟲のやうにわしや／＼と蝟集してゐるだらう。

汽車の畫を探すばかりでなく、この頃は自分で汽車を製造して

ペーパー
Paper

ママ、パパ、
Mamma, Papa、

見る興味に心がいつばいになつてゐるやうである。マッチの函を一列に並べる。敷島や朝日の袋を二十も三十も續けて、それを平行線に兩手で押して進行させる。朝日はごたくした色で貨物列車にさせられるが、敷島は裏を向けると、赤い圓いペーパーがそろつて、而かも單純でいゝ。だから客車だとなる。

パ、も汽車にのんの、
マ、も汽車にのんの、
ねえやも汽車にのんの、
坊やものんの、
みんな、みんな、みんな、のんの。
ひとりて歌つてゐる。黙つて聽いてゐると、知つてるかぎりの父の友だちの名を擧げてゐる。

アルス
圖書出版會社の
名

大森

東京府大森町
作者の父の住所

パン
Pain
フランス語

サンドウィッチ
Sandwich

ゴウニウウ
牛乳のなまり

牧野さんものんの、
大木さんものんの、
鎌田さんものんの、
アルスのをぢさんものんの、
山本のをぢさんものんの、
みんなみんなのんの。
それから
大森のおぢいちゃんにゆく、
おばあちやまのやはらかい眼。
など云つて、「國府津、國府津。」とやると、
「パン、パン、サンドウィッチ、
ゴウニウウ、

一三 汽車

11

アイスクリーム
Ice cream
日光
歌の雑誌
コドモノクニ
子供の雑誌
幼年の友
同上
赤い鳥
同上
マッチ
Match
デスク
Desk

ベントウ、
アイスクリーム、
日光、コドモノクニ、幼年の友、
赤い鳥はむづかしい。
煙草にマッチ。
やあ、ガッタン顛覆」と云つて片つ端から引つ繰り返して了ふ。
時とすると、
バ、の先生のゴウニウ、
マ、の奥様のパン、パン、
坊やの車掌、おねんね。
で、汽車もねんねして了ふ。
それが愈、高じて來ると、父のデスクの上に椅子から這ひ上つて、

装幀

この子供の國の巨人が手當りまかせに、書棚の本を取出すと、早速、汽車の創造が始る。機關車はいつも分厚な英和辭典である。客車は黄や赤の詩集類が常に選ばれる。宮廷列車のやうにきららしい。
貨物列車はたいがい學究的の書籍や全集物である。なぜといふに装幀が同一で、渾厚ではあるが、どこかしら鈍重で、微くさく感ぜられるらしい。それが辭典幾關車を先頭に立て、後ろから順々に押されて進んでゆくと、デスクの角へ行つて片つ端から墜落してゆくのが「バンザイ」となるのである。
死んでからなら仕方がないが、生きてゐるうちから、貨物列車の全集などは作りたくないものだ。
世の學者などはこの子には一顧の價值さへ認められてゐない

と謂つていゝ。

पीー、シユッシユッシユッシユッ。

鐵橋鐵橋ガツタン、ゴットン、ガツタン、ゴットン。

餡パンにサンドウィッチー。 पीーシユッ पीーシユッ。

(季節の窓)

近松半二

大阪の淨瑠璃作

者 天明三年(三四三)

歿 年九十九

晋陀落 紀州熊野の那智

觀音堂補陀落寺

西國順禮三十三

番札所の第一番

一四 順禮唄

近松半二

「晋陀落や岸打つ浪は三熊野の那智のお山にひゞく瀧つ瀬。」年
はやうくとほくの道をかけたる笈摺に「同行二人」と記せし
は、一人は大悲の蔭頼む、故郷を遙々こゝにきみる寺、花の都も近
くなるらん。「順禮に御報酬」といふも優しき國訛。「てもしをら

きみの寺

紀伊國海草郡紀

三井寺村金剛寺

西國順禮の第二

番札所

順禮

西國三十三個所

を巡りて禮拜す

るもの

三十三ヶ所は紀

伊和泉大和山城

丹波丹後近江美

濃に跨る何れも

觀音の靈場

しい順禮衆。どれく報謝進ぜう。と、益にしらげの志。「あいあ
い、有難うござります。」といふ物越から棲はづれ、可愛らしい娘の
子。「定めて連衆は親御達。國はいづく。」と尋ねられ、あい、國は阿
波の徳島でござります。「うゝ、何ぢや、徳島。さつても、それはま
あ懐かしい。わしが生れも阿波の徳島。そして、父様母様と一
緒に順禮さんすのか。」いえく其の父様や母様に逢ひたさ故、
それでわし一人西國するのでござります。」と聞いて、どうやら氣
に懸る。お弓は尙も傍に寄り、うゝ、父様や母様に逢ひたさに西
國するとは、どうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、其の親達
の名は何といふぞいの。「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの
年に、父様や母様も、わしを祖母様に預けて、何處へやら往かしや
んしたげな。それで、私は祖母様の世話になつて居たけれど、ど

取らるゝ命
阿波の徳島の城
主玉木家の重寶
國次の刀の紛失
したがもとで



(劇)門鳴波阿波順

うぞ父様や母様に逢ひたい顔が見たい。それで、方々尋ねて歩くのでござります。父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します。と聞いて、つら悔り、お弓は取付き、これくく、あの父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの歳別れて、祖母様に育てられて居た。とは疑もない我が娘、と見れば見る程稚顔、見覺のある額の黒子。「やれ我が子か、懐かしや」と、いはんとせしが、いや待て、しばし。夫婦は今にも取らるゝ命、固より覺悟の身なれども、親子といはゞ、此の子にまでどんな憂き目が懸ら

うやら。それを思へば、なまなかに名乗だてして憂き目を見んより、名のらで此の儘還すのが、却て此の子の爲ならんと、心を静め、よそくしく、お、それはまあ、年はも行かぬに、遙々の處をよう尋ねに出さしやつたのう。其の親達が聞いてなら、嘸嬉しうて嬉しうて、飛立つやうにあらうが、儘ならぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、かはい、子を振棄て、國を立退く親御の心、よくくの事であらう程に、むごい親と必ずく恨まぬがよいぞや。「いえく、勿體ない。何の恨みませう。恨むる事はないけれども、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あの様に髪結うて貰はうものと羨ましくござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと

逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす。」と泣いじやくりするいちらしさ。

母は心も消え入る思。「さてもく世の中に、親となり子と生る程深い縁はなけれども、親が死んだり、子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方^{こなた}どれほど尋ねても、顔も處も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、國へ往んだがよいわいの。」「いえく戀しい父様母様。たとひ何時まで懸つてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ちやて、何處の宿でも泊めてはくれず。野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては擲かれたり、こはい事や悲しい事。父様や母様と一緒に居たりや、こんな目には逢ふまいものを。どこにどうして居やしやんすぞ。逢ひたい事ぢや。逢ひたい。」と、わつと泣出す娘より、見

たがうがーがー

る母親は堪^たりかね、お、道理ぢや、かはいや、いちらしや。」と我を忘れて抱き付き、前後正體なげきしが、是程親を慕ふを、何と此の儘往なされう。いつそ打明け、名乗らうか。いやく、それでは、此の子も同じ罪。其の時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが爲と、お、段々の様子を聞き、吾が身の様に思はれて、悲しいとも、情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさへ居りや、また逢はれまいものでもない。これ、仕つけぬ旅に身を痛め、煩でも出りや、わるい。何處を證據に尋ねうより、其の祖母様の方へ往んで居るとの、追つつけ父様や母様が逢ひにいてぢや程に、悪い事は言はぬ、思ひ直して是からすぐに國へ往んで、随分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と宥め賺せば、聽きわけて、あいく、忝うござります。お前が其の

豆板
小粒の銀貨

様に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様の様に思はれて、わしや此處が往にとむない。どんな事なと致しませう程に、まうしお家様、お前のお側に、いつまでもわたしを置いて下さりませ。」「え、悲しい事言出して、また泣かすのかいの。先にからわしも子の様に思うて、爰に置きたい、往なしとむないと様思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲にならぬ事が有るによつて、それでつれなう往なすのぢや程に、聽分けて往んだがよいぞや。」といひつゝ、内へはり箱の底を探して、豆板のまめなを悦ぶ錢別と、紙に包んで持つて出て、これ、なんぼ一人旅でも、たとと錢さへやりや泊める。僅かなれども、志、此の銀を路銀にして、早う國へ往にや。必ずくわづらうてばしたもんな。と銀を渡せば、押戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物をたとと持つて

粉川寺
西國順禮第三番
の札所
紀伊國那賀郡粉
川町施音寺

小笠原長生
海軍中將
子爵
慶應三年(二三七)
江戸生

居ります。そんなりや、もう參じます。忝うござります。」と泣く泣く立つを引留め、それはさうでも、此は私が志」と無理に持たして、塵打拂ひ、これ、もう往にやるか。名残が惜しい。別れとむない。これ、今一度顔を」と引寄せて、見れば見る程胸迫り、離れがたなき憂き思。それと知らねど、誠の血筋。名残惜しげに振返り、「何處をどうして尋ねたら、父様や母様に逢はれることぞ。逢はしてたべ、南無大悲の觀音様。父母のめぐみも深き粉川寺、佛の誓たのもしきかな。」泣くく別れ行く……。(傾城阿波鳴門)

一五 遼東の月

小笠原長生

古來幾多の英雄豪傑は月に對して感慨多かりき。不幸の宰相

明州
支那浙江省寧波府

望郷の歌

あまのはらふり
さけ見れば春日
なる三笠の山に
出でし月かも

(安倍仲鷹)

來て見よかし

名月や來て見よ
かしの額際(西
山宗因)

いつか屍の

戈とりて月見る
たびに思ふかな
いつか屍の上に
照るやと(森五
六郎)

大和尚山

大連灣にある島
山

をして筑紫の謫居に泣かしめしも月にあらずや。渡唐の學者をして明州の祖道席下に望郷の歌を詠ぜしめしも月にあらずや。新羅三郎は之を仰いで足柄山頭に祕曲を奏し、上杉謙信は之を觀て陣中に風流を弄ぶ。「來て見よかし」と叫ぶ武骨の俠者、「いつか屍の上に照る。」と述懐せる憂國の壯士、皆是感慨の餘ならざるはなし。月や月や、何すれぞしかく多恨なる。

渤海灣頭、風吹荒び、怒濤舷を敲いて、銃を枕にする兵士の夢破れがちなる師走もいつかたけて、今宵最後の望の夜となりぬ。更けゆくまゝに、風和ぎ水平らかにして、天地唯寂然たり。獨り寒月の高く冴えて大和尚山の頂に懸り、峰に斑の残んの雪を有るか無きかに照すもすさまじく、前方近くに數箇所、砲臺屹然と空に聳えながら、是また闕として眠るに似たり。右方を顧みれ

春虫
柳樹屯の村

柳樹屯

大連の東金州の
南大連灣に臨め
る村落

ば、柳樹屯の村は煙の如く、肌寒げなる冬木立の間、散點せる賤が伏家に、未だ寝ぬ火影の二つ三つあるを見る。土民國家の危急を知らず、何をか爲し何をか語る。蠢爾たる彼等の境涯轉、憐むべし。これにひきかへて、我が國民が報公心の殷なることよ。その夫その子は、召集一令の下に、銃を肩にして起ち、千里の波を蹴て、數度の激戦毎に凱歌を奏し、陣中にありて月の圓なるを見ることこゝに七回。その妻その父母は、家を守り幼兒を育て、費を節し産を傾けて、獻金の後れんことを恐れ、四千萬人の熱血さながら涌きかへらんばかりなり。往くも留まるも、君の御爲國の爲なれば、固より一點の未練なからん。それ然り、然れども熱血の裏面は即ち多涙なり。今宵この明月に對して、豈一點望郷の情なきを得んや。余も亦心頭忽然として母の涕を浮べ出で

涓埃ハボクニツク埃ハボコリ
トヨコトヲ僅カナコト

師範國文第一冊用卷二

六

オのつたたいおろすべしにかへ

ぬ。

生きて恥死して恥なる時しあれば、

たゞ心せよ、ものゝふの道。

これ旅順の大勝を祝して遙かに余に賜ひし母の歌なり。一讀再讀して、教訓の意愈、深きを覺え、唯わが身の短才愚鈍にして涓埃の功なきを嘆ずるのみ。母は余を愛して愛に溺れず、屢書を寄せて常に余を勵ましながらも斯くのたまひき、自愛せよ、軍務に死するは武人の本懷なり。されども、病に斃るゝか、或は軍半途に送り還さるゝか、さることあらんには、母はいかばかり口惜しからん」と。されば習ひ給はぬ身の跣足に針の如き霜柱踏み碎きて、神に日參し給ひつゝ、皇軍の勝利と余が武運の長久とを祈り給ふこと、六箇月の間一日も懈り給はずと聞く。殊に夜

切々自愛思フコト

胡加リ聲ハ昔胡人が其處ウ草木
をまじり作つた所の竹田

衾を重ねず足袋をもはかず、又侍女に「暑し」「寒し」の二語を禁じ、以て遠く余の辛苦を分たんとし給ふ。その慈愛何にか譬へん。これに報ゆるは唯猛進の一事あるのみ。艦橋の欄干に凭りて沈思する折しも、忽ち聞ゆる胡筋の聲、濱邊の一隅より斷續して來る。その節一長一短一高一低、喃喃として咽ぶが如く、切々として怨むるが如く、悲愴坐ろに骨に徹し、艦上の兵士皆頭を低れてこれを聞く。無心の月は愈、冴えて天に中し、十餘の艦影水に落ちて夢よりも淡し。(國語教程)

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年(一八七六)
江戸生

一六 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も霰も天より降るものゝ面白からぬは無

きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の天空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れてちらく〜と降り出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑に融け盡す終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の粉の如く、球の如く、笹の葉に牙ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さら〜と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。

又春の雪の大きく軽らかに降りて、落つる間もなく色無き水の昔にかへる淡々しさもなつかしく、消ゆる〜も少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松・梅・樅などの梢には天華俄に落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。されど降る最中

鹿子斑

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子斑に雪のふるらむ(在原業平)

ワカニ降り入りミダレテ

と虚無に物事もなして

全に空にちよこ

仙境に仙人住せし言ひ幽閑な

土地

縹渺りかすかにてとどろきの様

辰樺り海邊を沙漠が遠

方の身屋や人物が空中又は

沙漠下は地平下にうつて見ゆ

じもの

山魏峨り高大な様

の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動き、陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には對岸を虚無に封じて、仙境の縹渺たるを欺き、半衢の陋街には連屋を瓊瑤に包んで、樓の魏峨たるを疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鶯鶯颺り零つる景色、見る眼もあやに美しき限なり。

すべて降る時の眺には廣きところより狭きところ好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして却て狭くなり、

表續連の詞動助詞動

加 變	佐 變	下 一段	上 一段	下 二段	上 二段	奈 變	良 變	四 段	未 然 形
(來)	(爲)	(隙)	(着)	受 け	起 き	死 な	有 ら	讀 ま	

さす らる する
むじずしむ

(爲)	(隙)	(着)	受 け	起 き	死 に	有 り	讀 み	連 用 形
き								
たけけたりぬつ しむり								

(來)	(爲)	隙 る	着 る	受 く	起 く	死 ぬ	讀 む	終 止 形
まじべし								

來 る	爲 る	隙 る	着 る	受 くる	起 くる	死 ぬる	有 る	讀 む	連 體 形
まじべし ごとしなり									

(爲)								讀 め	命 令 形
り									

[例 特]

ノ用活ノソキツニ形用連ノ變佐ハキ
クツニ形然未ハかしし
形兩ノ用連・然未ノ變加ハかしし又
ズカツニ變加テシ決ハキドケツニ

動詞の活用表

		下一段		段 一 上						段 二 下						段 二 上				段 四				未然連用終止連體已然命令								
良	奈	佐	加	(居)	(射)	(見)	(干)	(煮)	(着)	植	晴	消	響	添	兼	捨	寄	受	(得)	懲	報	恨	強		落	起	釣	讀	問	立	指	書
有	(死)	(爲)	(來)	(藏)	ゐ	い	み	ひ	に	き	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	り	い	み	ひ	ち	き	ら	ま	は	た	さ	か
ら	な	せ	こ	け	ゐ	い	み	ひ	に	き	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	り	い	み	ひ	ち	き	ら	ま	は	た	さ	か
り	に	し	き	け	ゐ	い	み	ひ	に	き	ゑ	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	む	ふ	つ	す	く
り	ぬ	す	く	ける	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	うる	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	ゆる	むる	ふる	つる	くる	る	む	む	ふ	つ	す	く	
る	ぬる	する	くる	け	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	うる	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	ゆる	むる	ふる	つる	くる	る	む	む	ふ	つ	す	く	
れ	ぬれ	すれ	くれ	けれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	うれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	ゆれ	むれ	ふれ	つれ	くれ	れ	め	へ	で	せ	け		
れ	ぬれ	すれ	くれ	けれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	うれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	ゆれ	むれ	ふれ	つれ	くれ	れ	め	へ	で	せ	け	け	

物を釋り其のまじり
かやや降まき去り
一上より曇りたる地銀色の地上

馬をさへ
馬をさへながむ
る雪の且かな
(芭蕉)



寺 閣 金 の 雪

近きは聊か霞みて狭きは却て廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新にあきらかなる空の蒼々と朗かなるが下に渣滓^{ツグツグ}鍊り去つて銀曇り無き地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころ無きだに面白くおもはる。「馬をさへ眺むる。」と人のいひたる旦、朝日の

雪草
解も空

金閣 京都の北方北山の麓にある鹿苑寺
銀閣 京都市の東北部にある慈照寺
眞如堂 京都市の東北部黒谷にある天台宗の大寺
岡崎 眞如堂の南平安神宮の邊
榎尾 共々京都市の西方にある山、高尾と合せて三尾と稱し紅葉の名所
東山 京都の東如意岳から稻荷山までの連山の稱
清水 東山の一部
清水観音堂 東山の一部分
寐覺の床 信州木曾上松驛の南十二町木曾川にある岩床

たる郊外のさまながらもよし。西の京は金閣、銀閣、眞如堂、岡崎、東山、清水皆晝とすべし。榎尾、榎尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寐覺の床の巖は鬼斧にまかせて千古ひややかに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈おもむろに流る、雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋稍重く壁の簪を戴ける松の村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなど、二十年の昔の、今の胸に猶あ



池 忍 不 の 雪

山王臺

麴町區永田町に在る丘

日枝神社のある

處

溜池

山王臺の東南麓にあつたが今は宅地になつてゐる

不忍の池

上野公園の西麓にある池

待乳山

隅田川の右岸淺草公園に近い小丘

ざやかなり。
東の京は御溝の水おだやかに、浮寝の禽の夢も安けく、雪にしづかなる大御代の午、また類ひなくめでたし。
山王臺いまなほ好からんが、溜池のありしむかしいたづらになつかし。

不忍の池一望千頃の景は言はずもあれ、石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の残莖に一撮の白きものを見たる、これも捨てがたき風情あり。暮れて猶暮れがたき雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゝめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとかや謂ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりとたゞふべし。

相生橋

深川區越中島より京橋區新佃島に架けた橋

中島

深川區越中島の一名

相生橋の橋長く、中島の島小なる取りいでて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたり、欣ぶ可く、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。洗心録

雨森芳洲

名は誠清

對馬侯の儒臣

寶曆五年(四二五)

歿

年八十八

一七 古今千遍

雨森 芳洲

舊歲御状相違し御返書未だ候予候うち
新歲の芳翰又々相違し一帯々拜見仕候録
御仕圖に以重業成る候由欣感此事に存す

做多
歐陽永叔謂爲
文有三多一看多
做多商量多也
(後山詩話)
做は作の俗字

奉り此許相愛ふ事社儀無爲に羅存名而度
昔た御佳作御見せし御座候事以後別々
御精出され御事には御座候や格別に御座
成され候様に存下奉り珍重之に過ぎず候詩は
做多看多商量多と申候鬼角多く御作候事
上手に御成り候事と云ふも高量の字先づは人と相談
すこととを申候事人と相談致すばつりにそは
之なく心を以て心に問ひ我の心より思案する事
をも商量と申候和韻の事仰せ聞けられ候事

繁右衛門
古川氏
名は方久
對馬藩の國家老
百人一首
藤原定家卿が古
今の名歌百首を
書いて洛西小倉
山の山莊に押し
たのがもと

此許御逗留中一時方御挨拶と存り悪詩も
作り申候事と上方より和歌の御座候事
難くは座候事と和韻をば作り申候事御座
怒下さる候事と云ふ一つをかしき話御座候事
書きつけ御目も懸け候御笑いもさる候事
去年より繁右衛門杯皆々寄合の歌の會を
致し間々私其の座奉り候事と云ふ御座候事
歌を詠み候事と申候事御座候事詩に平仄あり候事
覺之居候事と云ふ歌の遂に百人一首の講釋をり

古今
古今和歌集二十
卷
醍醐天皇の勅に
よりに紀貫之ら
撰

閻羅王
梵語
冥界で罪人を
Yamarāja
さばく王の一
人
勾死鬼
獄卒

承りたる事も御座なむのふけ里らむ一つも將を
明き申す事候其上歌詞をいし堂存申す候存
古今千遍讀と申す願を心ふして早く最早百
五十遍は昨日迄に讀みおけ申候今迄の讀り小
致法ハハ十四の七月に千遍の數満ち申候後りに
御座候其間に老毫致おか又は閻羅王より勾死鬼
にお遣り申す候は候べき様も之なく候と
おつ願を満し候心に御座候右千遍讀みおけ
さう歌を讀みかり候心に御座候是は壽命の事ハ

おふのけ置きその分別に御座候はばさり候を
き事に御座候得し私最早世間に望ある者候之
なく候為候候致し候死を待た候し一奇事と
存し立ち候事に御座候此段書きつて御目に懸け
候ハ老人ども候存候事に御座候故皆様候
御年少小御座候ふし候ハ尚候に候春
候に候ご様申す度此の如くに御座候因之の面
へ御参會方節は旨御傳へ成し候と候候
奉り候申度事も御座候為り老筆堪へ難く

早貴答に及び信餘は後言を期し信恐謹言

(新撰書簡集)

石川依平

遠江の歌人
安政六年(三二九)
歿
年六十九

一八 四季の月(今様)

石川依平

てりもせずくも

りもはてぬ春の

夜の朧月夜にし

くものぞなき

(大江千里)

五月來ば鳴きも
ふりなん時鳥ま
だしきほどの聲
を聞かばや
古今集讀人不
知)

梅咲く園に霞みつゝ、
曇りも果てぬ朧夜の

峰の櫻の花ぐもり、
月こそ春の光なれ。

まだしきほどの時鳥、

はつね待つ夜の枕より、

馴れて涼しき月影に、

閨の戸さゝて明すなり。

桐の葉わけにかげ見えて、

秋とほのめく夕べより、

すさまじ

すさまじきもの
にして見る人も
なき月の寒けく
すめる二十日あ
まりの空こそ心
細きものなれ
(徒然草)

立待ち、居待ち、待ちとりて、幾夜か月をながめけん。

木葉ふりしく山の端の時雨にくもり霜に冴え、

雪に照りそふ月影を 　　などすさまじと思ふべき。

(今葉歌集)

姉崎嘲風

名は正治
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教
授
明治六年京都府
生
及
高山樗牛
五年の昔

一九 忘れ難き日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消え失せぬ。健

明治三十三年三月
清見潟
東海道興津の海

惆悵
事我かき、抑クナラヤ
ラ恨ミ悲クト

函嶺
箱根山

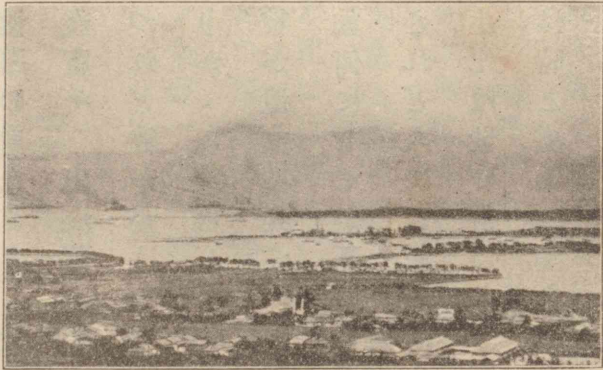


清見潟よ富士

在なれ。「再び早く相見ん。」との別れの言葉は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛交ふ海の面渺として、埠頭の家屋、武相の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼、かくて相別れたる我が友今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて清見潟のほとりにさすらひ來り、こゝに別後の愁を銷せんとせしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日此の日我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然惆悵として無限

うにたりナントナリ

有渡の山
静岡縣安部郡久能山の別稱



山を望む

の感に沈ましむ。
三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに、星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。
人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に遣し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山、影かすかにして、袖師の松原、

袖師の松原
三保の松原の一
部
埋骨の地
静岡安部郡不二
見村龍華寺

雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼が姿は今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫て、今は五年前の今日の別離を偲んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。

されど人に百歳の齡なく、世に別離の愁を知らざる人はあらず。生死は世の常なり。別離は却て懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新にして、我が思慕日毎に彼に

通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えず。ねど彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼、平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴はん。人里には燈火已に影を收めぬ。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつつ、今宵一夜の眠に入らん。(碎雲集)

二〇 友に寄す

高山 樗牛

如何涕暮——なききしひや此方お愛らす

高山樗牛
名は林次郎
文藝批評家
文學博士
明治三十五年歿
年三十二
この文は明治二

十九年一月六日
熱海の客舎より
學友藤井健治郎
に寄せたもの

碌々羅在の閑餘事をながら済安心下され
たゞ此頃と事に終れぬ無沙汰
打退ぎの毎度勝手の事のみ済頼
申上げの面倒察入做徒然の折に
物ほきまの色に注文申之れども實
際手にとるは稀に水画水彩畫
描きみんとて先頃繪具など取寄せ
ども是また手に觸きず願之れども我を

から候くも暮つるを思ふれ
どもそそれぬをわづかに樂く過
申做

小生の室は熱海中にて最も眺望よき處
にて魚見崎より真鶴寄まで護岸の裏
に草の朝日影さへ入る頃に起き出でて
九時頃より濱邊を散歩致し午後は
圍碁大弓等に費すの毎日は時に

魚見崎
熱海の南端の
岬
真鶴崎
相模國足柄下郡
真鶴にある岬
熱海の北方三里

ハイネ
Heine
(1799-1856)
獨逸の詩人

一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原
に仰臥し大海の浩蕩小恙して朗吟する
こゝも此座小或は日暮の空ひとり磯邊乃
松に腰お懸きて夢ともなく現ともなき思
に耽るこゝもこれあり倦ぐまや自然の無盡
藏なる今はた驚かるるまじりに此座を
我も人を自然と口には言へ幾人か
其の真意を會得したるや天の響地の

響思ひ見るだま高く深く倦ぐもその感
る人の心は如何ばかり高く深きを此に
べきやうく夕日影も名残なく暮き果て
渾火ほの見ゆる頃小相成候へばざんざくの
波音のみ高く相成り水と空と此別も消えて
天地を一つになせしと思はるるこゝの夜
は眠のたんに造らざりたるものにあらむとの
詩人此言葉の今更小思ひ出でられ倦

笹川 種郎
臨風と號す
歴史家
文學博士

大橋 又太郎
號は乙羽
文學者
明治三十四年歿
年三十三

熊谷 五郎
教育學者

去年の暮より二三日前までは月色殊の外
めでたくあかず夜をふりて打眺免申候
元日の夜も十七夜なりしゆ五月の海を出
づる頃小生の宿に笹川姉崎大橋熊谷の
諸氏と共に觀月の小宴を張り申候ひき
一昨日の夜九時頃まで候ひたん林
就のんとてはあつた窓の間より海邊をな
がめ眺むが缺月るがう一間むかへ海と離る

言ふまじりなくめでたき景色をくまひか
ば下女に命じて雨戸をあきさせ欄
よりてハイネを朗吟致其時の心地よき
あはれわれこのまゝ石も金にもなまか
思われゆひき

貴兄等ハさぞか一日と決勉學の心事なら
んと羨おの申候時ふと決文賜ひ候へ
し病氣も大方も宜しくの間心配下き

るまどく候申上げたき事山におきあ
ま能へどもまづこれより筆をとめ候

(穉牛全集)

三 勤王家の歌

佐久良東雄

常陸の人

櫻田の變に坐して萬延元年(三五)年五十年死

佐久良東雄

事しあらばわが大君の大みため人もかくこそ散るべかりけれ。
(落花を見て)
おきふしも寐ても覺めても思ひなば立てし心の通らざらめや。

伴林光平

河内の人

大和五條の天誅組に加り元治元年(三五)刑死年五十二

伴林光平

ますらをの屍草むす荒野らに咲きこそにほへ大和なでしこ。
度會わたらひの宮路みやぢに立てる五百枝杉、かげ踏む程は神代なりけり。

佐久間象山

信濃松代藩士

幕末の先覺 元治元年(三五)横死年五十四

佐久間象山

梓弓眞弓槻弓、さはにあれどこの筒弓にしくものあらめや。
(詠銃砲)

みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠く物をこそ思へ。

久坂義助

いくたびもくりかへしつゝ、わが君の御言しよめば涙こぼるも。

久坂義助

長州藩士

勤王家

元治元年(三五)戦死

年二十六

三ノクワリ陸奥
蝦夷

もののふの臣の男の子はかゝる世になに床の上に老いはてぬべき。

平野國臣

平野國臣
福岡藩士
勤王家
元治元年(二三四)
刑死
年三十七

わが心岩木と人やおもふらん、世のため捨てしあたら妻子を。數ならぬ草の下葉の露の身も死なばや死なん、大君の邊に。

野村望東尼

野村望東尼
福岡藩士野村貞
貫の妻もと
慶應三年(二五七)
歿
年六十二

平らけき道失へる世の中をゆりあらためん天地のわざ。
(安政大地震の折)

三條實美

三條實美
舊公卿
太政大臣
明治二十四年薨
年五十五

ものゝふの大和ごころをよりあはせ、末ひとすぢの大繩にせよ。

大君はいかにいますと仰ぎ見れば、高天の原ぞ霞みこめたる。

(筑紫にさすらひし程の歌の中に)
萬世の名こそ惜しけれ、うつせみの世の人言はさもあらばあれ。

岩倉具視

岩倉具視

舊公卿
右大臣
明治十六年薨
年五十九

勅なれば髪はきりもし、剃りもせん、清き心は神ぞ知るらん。賤が屋に身は垢つきて住めれども、なほすゝけぬは心なりけり。
(岩倉村に籠りけるころ)

杉浦重剛

教育家
宮内省御用掛
日本中學校長
稱好塾主
近江膳所藩主
大正十三年歿
年七十一

三 杉浦重剛君を弔す

穂積陳重

穂積陳重

法學者
法學博士
樞密院議長
安政二年(二五七)
伊豫宇和島藩生

謹んで杉浦重剛君尊靈に拜告す。
不肖陳重は君の數多き友人の中で、最も古くかつ最も親しく交

大學南校
明治二年開成所
を改めて大學南
校といつた
今の東京帝國大
學の前身

誼を辱うしたる一人として、推されて友人を代表し、茲に靈柩の
前に拜伏して、幽明別離の辭を述べべき、最も悲しき役目を負ふ
ことになりました。回顧すれば、私が始めて君と相知るに至れ
るは、明治三年、朝廷が諸藩に令して貢進生を徴し、大學南校に入
らしめた時でありまして、君は膳所藩の貢進生であり、私は宇和
島藩の貢進生であり、殊に年齢を同じうし、學科を同じうした爲
でありまして、今を距ること實に五十六年の往時であります。
貢進生の年齢は十六歳より二十歳まで、ありましたから、君は
當時十六歳の青年で、生徒中最年少者であつたにも拘らず、其の
人格の高邁にして、已に自ら成人の風が有り、殊に漢學の素養最
も深かりしが爲に、嶄然頭角を見はして、夙に儕輩の推重する所
と爲り、慷慨氣節を尙ぶの青年は、同氣相求め、期せずして君を中

驥尾
瀨淵雖二篤學一
附二驥尾二而行
益顯。(史記)

印象
物事か心に取つた、此能心
牛耳
耳と云ふ頭

牛耳
盟主の意
諸侯盟誰執二牛
耳一(左傳)



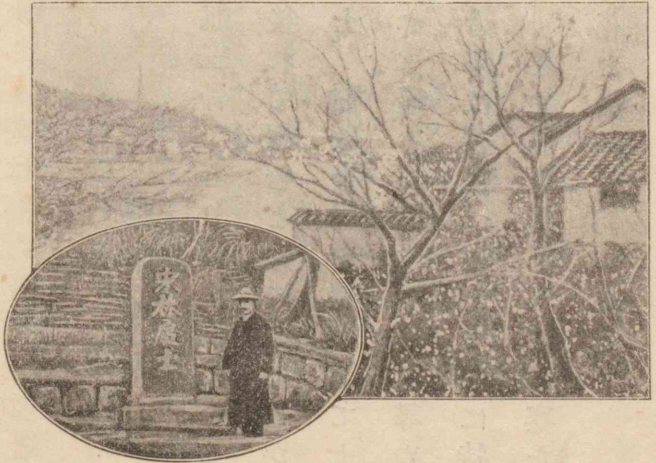
杉浦重剛

心とし、校中に一團を爲し、或は言論に、或は文章に、又時としては
青年客氣の餘、誤つて實力に訴へ、只管士氣の振作と校風の廓清
とに努めたものであります。私共舊友も
其の驥尾に附し、當時
君との友交に依つて
受けた感化は、私共の
生涯に極めて深き印
象を遺したといふこ
とを自覺するものであります。此の如く君は青年の學生時代
に於て、既に儕輩の間に牛耳を執り、身を以て範を示し、氣を以て
事を行ひ、至誠人を動かすの素養が有つて、後に育英を以て事業

西湖
支那の浙江省柿
州府
錢塘江を廻るこ
と二十哩のこ
る

百磯城の
もしきの大宮
人は暇あれや梅
をかざしてこゝ
につどへる(萬
葉集)

れを江北の友に贈つて曰く、
折梅逢驛使、寄與隴頭人。
江南無所有、聊贈一枝春。
宋の時、林和靖といへる高士西湖
の畔に棲み、梅を植ゑ、鶴を飼へり。
屢、舟を湖中に泛べて遊ぶに、客至
れば童子鶴を縦つてこれを報ず。
その梅を詠じたる句に、疎影橫斜
水清淺、暗香浮動月黃昏。といへる
は梅花詩中千古の絶唱と稱せら
る。



墓の靖和林及梅の山孤

わが國に於ても既に萬葉古今の歌集に梅花の詠多し。百磯城

いざりじうたカ

わが宿の
わが宿の梅咲き
たりと告げやら
ば來ちふに似た
り散りぬともよ
し(萬葉集)
色こそ
春の夜のやみは
あやなし梅の花
色こそ見えぬ香
やは隠る(古
今集凡河内躬
恆)

人はいさ
人はいさ心も知
らず古里は花ぞ
昔の香にほひ
ける(古今集紀
貫之)
藤原公任
平安時代の歌人
學者
四條大納言
長久二年(七五)
薨
年七十六

の大宮人は梅を挿頭して野邊に遊び、わが宿の梅咲きたりと告
げやれば好事の士は誘はずとも來る。或は闇の夜に「色こそ見
えぬ香やはかくる」と稱へ、或は昔ながらの花を見て「人はいさ
心も知らず」とあやぶめり。菅原道真十一歳にして「月耀如晴雪
梅花似照星」と賦せしが、後年太宰府に左遷せられ、將に家を出で
んとして庭前の梅を眺めていはく、
こちふかばにほひおこせよ梅の花、
あるじなしとて春を忘るな。

藤原公任また幼にして宮中に候して、
しらぐとしらけたる夜の月影に
雪かきわけて梅の花をる。
と詠みければ、主上深く叡感まし、公任もまた生涯の思出こ

無骨無風

生田の森
今神戸市の中に
ある

梶原景季
景時の長子

荻生惣右衛門
祖來と號す

江戸の儒者
享保十三年(三八
八)歿

其角
年六十三

榎本氏

江戸の俳人
寶永四年(三六七)
歿

年四十七

の時にありきといへりとぞ。
傳へていふ、前九年の役安倍宗任捕虜となりて京師に入れるに
卿相雲客、奥の夷のさこそ無骨なるらめ、いざ戯れて笑はん」とて
一枝の梅を示して、これは何ぞと問ふ。宗任とりあへず。

我が國の梅の花とは見つれども、

大宮人はなにといふらん。

と答へたるに、一座しらけて恥入りぬとなり。源平の亂、生田の
森にて梶原景季片岡の梅の盛なるを手折り、箆にさして奮戦せ
るに、花は風に吹かれて鎧の上に散れるを、敵も味方もやさしき
武士の振舞かなと感じけりとかや。

梅が香や、隣は荻生惣右衛門。

とは、元祿の頃其角が名聲喧傳せる學者祖來をその花に喩へて

嵐雪

服部氏

淡路の人

江戸に住す

寶永四年(三六七)

歿

年五十四

烈公

徳川齊昭

水戸藩主

勤王家

萬延元年(一五〇)

薨

年六十一

齋藤拙堂

名は正謙

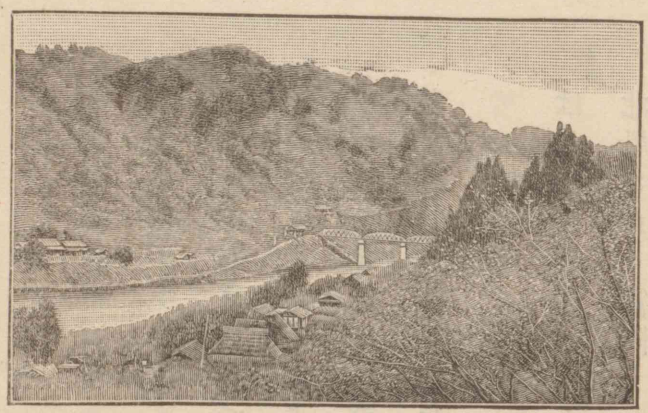
伊勢の漢學者

慶應元年(二五五)

歿

年六十九

賛したるもの。



梅の瀬月

みれば、見得たり瓶中の芳姿。

梅一輪々々ほどのあたゝかさ。
とは嵐雪が窓前の南枝に日々の
春を占へるなり。水戸の烈公が
梅を種えしより偕樂園は今に關
東の名園となり、齋藤拙堂が記勝
に寫されしより月瀬は櫻の吉野
と並べ稱せらるゝに至りぬ。
春寒未だ去らざる時、爐を擁して
古人を友とすれば、遠寺の鐘聲霜
に冴ゆ。一陣の暗香に驚いて願
これ晝間の散策に竹外の一枝を

手折りもて來し家づとなりけり。(東園遺稿)

二四 鶯

島崎藤村

島崎藤村
名は春樹
詩人
小説家
明治五年長野縣
木曾生

さはれ空しきさへづりは、
雀の群にまかせてよ。
うたふをきけや、鶯の、
すぎこし方の思出を。

はじめて谷を出てし時、
北風さむく、霰降り、
うたふをきけや、鶯の、

行くへは雲に隠れてき。

露は緑の羽を閉ぢ、
霜は翅の花となる。

あしたに野邊の雪を噛み、
ゆふべに谷の水を飲む。

さむさに爪もこぼりはて、
絶えなんとする度ごとに、
また新なる世にいでて、
くしきいのちに歸りけり。

雪

あゝ、枯菊に枕して、
 冬のなげきを知らざらば、
 誰が身にとめん、吹く風に、
 にほひ亂るゝ梅が香を。
 谷間の笹の葉を分けて、
 凍れる露を飲まざらば、
 誰が身にしめん白雪の、
 下に萌立つ若草を。
 げに春の日ののどけさは、
 暗くて過ぎし冬の日を、

濃染

花笠

青柳を片絲によ
 りて笠の縫ふて
 ふ笠は梅の花笠
 (催馬樂)

鶴見祐輔

前鐵道省參事

思ひしのべる時にこそ、
 いや楽しくもあるべけれ。

梅のこぞめの花笠を、
 かざしつ、酔ひつ、歌ひつゝ、
 さらば春風吹來る、
 香の國に飛びて遊ばん。(藤村詩集)

二五 紐育倫敦巴里

鶴見祐輔

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。併し其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉

それ自身に本質的の差があるわけではないけれども、英佛人の勤勉の差は單に外形上の相違だけではないやうである。それは兩國の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば其の國民性は如何に相違して居るだらう。こんな事を考へながら私は一人てよくパリの公園をぶらついた。そしてこれにアメリカを今一つ加へて、三國の國民性を比較して見た。三國の特色はその國の大都會に於て著しく眼に着く。それは都會は其の國の國民性を最も鮮かに映し出してゐるからである。多くの人はニューヨークは餘りに歐洲化してゐるといふ。しかしニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの空氣が全身に躍動するのを意識せずにはゐられない。ニューヨークはやはり米國である。そしてロンドンは英國であり、パリは佛國で

空氣リ気ケ

象徴
無形なもの
有形ものに
有るに
有るに
有るに



巴里凱旋門

ある。恰も東京が日本であるやうに。

朝早くパリの街を歩くと、石の舗道の上には、もう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舎と共に、心地よい朝の活動を象徴してゐる。黒い質素な着物を着た女たちが、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灌いだりなど

してゐる。

ロンドンの下町に晝頃行くと、狭い側道の上に、商館や銀行などの書記かに見える若者が、帽子も冠らずに何百人となく忙しげに往來してゐる。私はこの群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつてゐるこの人々の日常生活を考へた。そしてフランス人とは種類の違ふこの人々の勤勉さをも考へた。こんな時には、いつもフランスの小説家クールパンの言葉が脳裡に閃いた。「佛國は蜜蜂のやうに勤勉に、英國は蟻のやうに精勵である」と。パリとロンドンとの生活を見てゐるうちに、この言葉の深い意味が日一日と自分の頭腦に深く沁みていつた。晴渡つた初夏の日盛に、寸刻の休もなく花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、いかにもよく佛國人の心持を表して居り、來るべき冬の支度の爲、



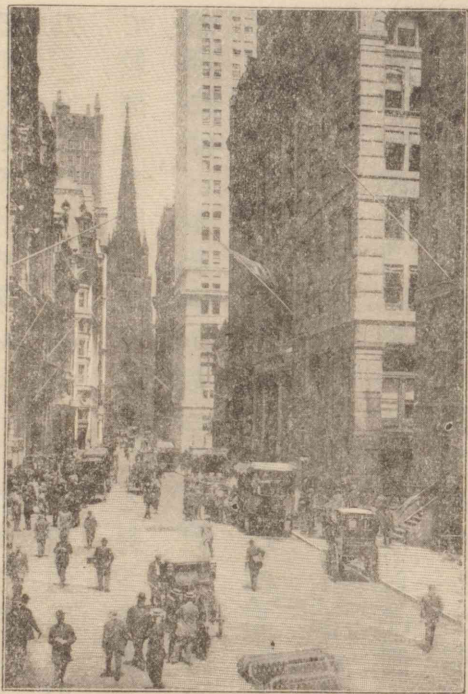
倫敦

營々として重い餌を引摺つて往く健氣な蟻の精根が、いかにもよく英國人の勤勉を表してゐるやうに思はれた。それならば米國人のあのいらいらした忙しさは何に譬へられようかと考へて見た。私の頭のなかに、ふと淺草の觀音の鳩が浮んで來た。いつ行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押合ひへし合ひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅されて飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それ

人りまじり
無間地獄の叫びと言ふことば
さわーこと

でも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へていつまでも餌を拾つてゐる。米國人の勤勉は正にこの鳩のやうに餘裕がないと、私には考へられた。朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乗る人々は、これが此の世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな雜沓を目撃する。或日私は汽車の切符を買ひに市内營業所に往つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が私の行先と乗るべき列車とを聴取り、やがて右手の袖をちよつと捲り上げて、鉛筆持つその手を切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣にとられて見てゐると、忽ちくわつと手を紙の上に落して、すく／＼と切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。たつた今手を振つたのは結局手に運動をつ

ける爲だつた。私は噴き出すやうなをかしさを感じた。なにもさう手に運動をつけないでも大して時間に相違もなく字が



紐 育

書けようし、又運動をつける時間だけ無益のやうな氣がした。

その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に賃金の一覽表を貰ひに行つた。す

ると係の若い英國紳士が、たしかこの机の中に一枚だけ統計表を入れて置いたはずだ。といつて、自分の机の引出を開けた。私

は見るともなくその中をのぞきこんで見て驚いた。まあなんといふ多数の書類だらう。累々と種々な紙片が堆積されてある。それを件の若い紳士は手を突つこんで、かさ／＼と搔廻して、「こゝにはない」といつて、次の引出、又その次の引出を開け、そして最後の引出の底から、やつと見つけ出した。「これは差上げるわけにはいかないから、こゝで見て下さい」といふから、一度見ただけではとても覚えられませぬね」と答へると、ちよつと當惑して、「それでは私が寫してあげませう」といつて、それを別な白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、側にある若い女のタイプストに命じて、一分間に寫させるところだが、件の若い紳士は、まづ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の統計表を置いて、その上に白紙を當て、書出した。私はちよつと面喰つた形で

この異様な謄寫法を見てゐた。すると彼は白紙を左手で持上げて、下の原本をのぞいて、次の行の數字を謄記して、又白紙をその上にべたりと置いて、謄記しただけ書いて、又前のやうに紙を持上げて原本をのぞいて、又その上に重ねて書いた。不思議な遣方だと見てゐると、やがて書終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度はその紙と原本と二枚持上げて下敷になつてゐる吸取紙の上に裏向に置いて、丁寧にインキを拭取つて、さて私にその謄寫したのをくれた。ニューヨークから着いたばかりの私は全く呆氣にとられて、こゝを出ていつた。そして幾回となく鉛筆持つ手を振つて運動をつけて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

その春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない私

は誤つて受取人欄へ自分の住所姓名差出人の欄へ先方の住所姓名を書いた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣づいて「おや」といふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。なるほどこれで送票は完成したわけである。しかもそれがほんの一瞬間だつた。私は全く感服してしまつた。そしてニューヨークの切符賣とロンドンの役人とパリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。鳩と蟻と蜜蜂と。(三都物語)

二六 日本人

正木不如丘

巴里の市内に居るときは、異國人として相當の禮儀作法を守る

正木不如丘
名は俊二
醫學博士
明治二十年長野
縣上田に生

のであるが、足一度郊外に出ると、故國に居る程の心のゆるみが出て来る。

或日五六人の友と郊外へ出た。解放されたやうな氣持になつて、森林の中をデカンシヨなど歌つて散歩した。

砂を運ぶトロッコがあつたので、それに二人ほど乗つて残りの連中が押動かした。トロッコといつても自動車であるし、又線路もあるので、東京のタキシ―よりは面白い。

森の深さを二三哩も走らせて行くので、何とも言へぬ心持である。若し労働者に叱られたならば、金さへ出せば、大目に見てくれること請合である。森の中で花を見た。櫻か梅かで論もした。花といへばマロニエの花しかない。巴里の郊外で、花らしい花を見出したのであるから、有頂天である。

トロッコ
Truck 鐵道の無蓋貨車
タキシ―
Taxi-cab タキシ―カブの略
辻待自動車

ガソリン
Gasoline
軽油

愉快が度を過ぎて来て、今までは後押しをして居たのであるが、一つ誰かガソリンの力で動かす者はないかと相談を始めた。これは流石に誰もやらなかつた。相變らず代るく後押し役を務めて遊んで居たのである。

森の奥を通り過ぎるとふと小さな町が見えた。この線路はその町まで續くことが分つた。線路が時々下り坂になる。その度に後から押しして勢がついてくると、後押しも車に飛乗るのであつた。

これを繰返して居るうち、今度もまた下り坂になつて走り出した。後押しも飛乗つた。車はひた走りに走る。止めるに止められずたゞ走りに走る。

「おい、とめろ、とめろ。」

皆總立ちになつたが、自動車のトロッコは様子が違ふので誰も手を出す者がない。見ると、行く手に可なりの川がある。その川にトロッコ専用の橋がひよろ／＼とかゝつて居る。その橋を見るや否や、皆生き心地もなくなつた。車は知るや知らずや全速力で走る。車は早橋にかゝる。橋がゆら／＼と揺れ始める。覺えずお互にしがみついてしまふ。久しぶりに「南無阿彌陀佛」の聲さへ聞えた。

トロッコの底に重なり合つてゐた日本人の各々に「わあ」といふ人聲が聞えた。一人がそつと頭をあげて見ると、橋はとうに通り越して、車は街上を走つて居る。閑人が出て見て居るのであつた。

車は次第に速力を緩めて來た。トロッコの底には相變らず重

なり合つて息を殺して居る。
車はとまつた。顔を擧げる勇者はない。段々人聲が増して來る、近づいて來る。

「君、出る。」

誰も出る者がない。

ぬつと車の上から頭を出した者がある。 巡查君である。 にくこにこ笑つて居る。

「御免なさい、皆さん。」

巡查の聲に勇氣を得て、トロッコの底の日本人は同時に車から飛び出した。

「日本人萬歳！」

町の中央に止つたトロッコの周圍には百人近い人々が集つて

みた。

洋行談の最後の頁である。(特志解剖)

十返舎一九

本名重田貞一

駿府の生

徳川末期の戯作

者

天保二年(四九)

歿

年五十七

鹽井川

遠江國掛川町の

東にある

二七 鹽井川

十返舎一九

東雲まだき驛路の忙しげにひきつる、朝出の馬の嘶に、旅疲の目を擦りながら、彌次郎北八起き出でて支度し、爰を立出で、鹽井川といふ處に至りけるに、昨日の雨つよくして橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾まくり上げてこゝを渡るに、彌次郎北八も、いざや引連れ渡りなんとする折柄、京のぼりの座頭二人連、此の川の歩渡なるを聞きけるにや、一人の座頭、犬市カニも、し、川は膝ざりもござりますかな。カニ犬八「さやうく、しかし水が

さんなむめ、
りやんごうさい
拳を打つときの
呼聲

早いからおめい方あ、あぶない。用心して渡んなせえ。」犬市「は
て、成程水の音がよつほど早い。」といひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投
げこんで考へ、犬市「いや、こゝらがどうか浅いやうだ。こりや猿
市、二人ながら脚絆をとるも面倒だ。お主若役におれをおぶつ
て渡れ。」猿市「はゝゝ、ずるい事をぬかす。拳でまゐらう。何で
もまけた者がおぶつて渡るのだ、よしか。」犬市「こりや面白い。
さあ来い、さんなむめで。」猿市「りやんごうさい。」と片手拳を
うちながら、兩方から左の手を出した。互に拳をうつ手を握り
合ひ、握り合ひ、犬市「さあ、勝つたぞ、く。」猿市「えゝ、いまくしい。
そんならこの風呂敷包を貴様一緒に背負はつせえ。それ、よし
か。さあ来い、さあ来い。」と支度して背中を向ける。彌次郎「これは
有難い。」と猿市におぶされれば、猿市は連の犬市と心得て、さつと川

犬市「こりや猿市」

へはひり、難なく向ふへ渡ると、こなたの岸に残りたる犬市、犬市
「やい、猿よ、どうする。早く川をわたさぬか。」猿市向ふの岸にて
聞きつけ、猿市「こりや冗談な奴だ。たつた今おぶつてわたした
に、またそつちへいつておれをナゲ鬻るな。」犬市「はかあいへ。おの
ればかり渡つて太い奴だ。」猿市「いや、太いとはそつちのことだ。」
犬市「これや、おのれ兄弟子に向つて言語道斷な。早く来てわた
さぬか。」と、白い目をむき出し腹立つたる故猿市仕方なくまた
こちらへ渡り歸り、猿市「さあ、そんならおぶさりなさる。」と背中を
出す。北八、しめたと手を掛けておぶされば、猿市またさつさと
川へはひる。犬市は大いに急きこみて、犬市「これ、猿市、どこにあ
る。」猿市、川の中にて、猿市「いや、こいつは誰だ。」と、北八を川の中
へどんぶり落す。北「やあい、助けてくれ、助けてくれ。」と、手足をも

がき流れる故彌次郎飛びこみ引きあぐれば、頭から骨まで腐るほど濡れ、北「え、座頭めが、とんだ目に遇はしやがつた。」彌「ははは、まづ着物を脱ぎやれ、絞つてやらう。」北「全體彌次さんがわるい。なんのおぶさらずとも宜いことに、お前が手本を出したから、ついおれも。」彌「川へはまつたか、氣の毒な。は、は、は、それで一首やらかした。」

はまりけり、目のなき人と侮りてむくいは早き川のながれに。

北「え、聞きたくもねえ。よしてくんな。あ、寒い、寒い。」裸になりがたく震へながら着物を絞る。この内、座頭は川を渡り行き過ぎる。彌「こゝで干してもゐられねえから、着換を出して着やれ。どこぞで火を焚いて貰つてあぶるがい。」北「え

えいまくししい。風を引いた。はあくつしやみ」と、ぶつく小言をいひながら、着換を出して着換へながら、くさつた着物は絞つて引提げ、出掛けると程なく掛川の宿に至る。(東海道中膝栗毛)

二八 顔淵

安藤 圓秀

孔子が陳蔡の野で、困しまれた時のことである。食糧がなくて、數日絶食の姿、弟子たちは疲勞、困憊の極に達してゐた。

水汲に出た子貢が、井戸端から目を放つた時、稍離れた軒下の竈の傍に蹲つて、克明に燃えさしの木を片付けてゐる顔淵の姿がふと目に留つた。

安藤圓秀

漢學者
東京帝國大學
助教授

子貢

孔子の門人
本名は端木賜
言論に長ず

顔淵

孔子の高弟
亞聖といはれる
名は回

彼は感謝の心に一杯になつて、顔淵の姿を見守つてゐる。顔淵は薪の始末を終へると、竈に寄添うて釜の蓋を取放つた。抑へられてゐた湯氣は棒のやうに舞上つた。

一二分も経たぬ内、子貢は見てはならぬものを見た様にぎくりとした。それは釜の内から一杓子の御飯をすくひ出して置いて蓋をした顔淵が、暫く躊躇した後、杓子の飯を食べるのが、はつきりと認められたのである。

子貢は全身に冷水を浴びた様に感じた。名狀し難い錯雜した思が旋轉して、急遽井戸端から去つた。

「先生」

子貢は興奮した面持で孔子の座へ近寄つた。

「先生うかゞひますが、どんな仁者でも愈窮迫して來ると、素地の野性が出て來るもので御座いませうか。」

「勿論そんな事はない。そんなことでは仁者とはいはれない。」

「先生。私はたつた今、情ないことを見せられました。」

「それは何か其許の思ひ違ひではないか。私はどうしても、回を疑ふ氣にはなれぬ。回に限つて其の様なさもしいことをしようはずがない。これには何か仔細があらう。まあお待ち、私がかいて見よう。」

躍起になる子貢を押鎮めて、孔子は顔回を呼んだ。

「先生、何か御用で御座りますか。」

「今日は其許は御飯焚ださうぢやな、御苦勞々々々。」
「いゝえ、子貢さんのお持ちの米のお蔭で皆々大喜で御座います。もう間も無く御食事が整ひます。」

「久し振の御飯ぢやからのう。——實はの、私は昨晚死なれた母親の夢をありくと見ましたのぢや。私達が斯うした羽目になつてゐるから、何か蔭ながら助けて居て下さることかとも思つて、今朝は大變お懐かしく思つてゐるのぢや。御飯が出来たら御供養にお初穂を差上げたいと思ふから、少しお供へをしてくれぬか。」

「あ、さうでしたか。それはつい不調法なこと致しました。實は先程餘り急ぎ立て、焚きましたものですから、出来工合がどうであらうかと思ひまして、釜の蓋を取つて見ました時、ど

うしたはずみか、軒から煤の塊が釜の中へ落込みました。早速煤の附いた處だけ杓子ですくひ取りましたが、汚れたものを神様へのお初穂にも恐多いし、それかと申して、縦令一粒でも、子貢さんのお情の籠つたものを棄て、しまふのも勿體無いし、煤を取去つて、鼠色にはなつてゐましたが、私が戴いてしまひました。そんな譯でございますから、もうお初穂に差上げることは出来まいと存じます。」

「お、さうかく。何、それでは此の次に炊いた時で宜しい。皆も嘸かし待つて居ることぢやらう。早く食べられる様世話してやつてくれ。私も一緒に戴きませう。」

「私の不行届から本當に残念な事を致しました。ではお支度を致しませう。」

顔淵は一禮して靜かに出て行つた。孔子は微笑しながら、
「賜や、どうぢや。」

「誠に恐入りました。」

「私は何處迄も回を信じてゐる。私の信頼は決して裏切られることは無いと思ふ。——のう賜や、私は却て其許の疑ふ心をあさましく思ふのぢや。だが決して其許ばかりを責めようとは思はぬ。お互に道に因つて結びつけられてゐる私たちが、如何ほど飢に苦しまうとも、僅か一杓子の飯を中心にして互にあさましい疑を抱かねばならぬことを悲しく思ふのぢや。」

孔子は忍び難い闇然たる思ひに鎖されて堅く口を噤んだ。

「誠に——誠に何とも申譯がありません。」

本山荻舟

名は仲藏

新聞記者

澤庵

禪僧

名は宗影

但馬出生

品川東海寺の開

山

正保二年(1649)

寂

年七十三

柳生但馬守

名は宗矩

劍士

大和柳生生

澤庵と友

正保三年(1650)

卒

年七十六

身の置きどころも無いやうに恥ぢ入つた子貢は其の場にひれ伏して暫くは身動きもし得なかつた。(孔子とその徒)

二九 虎

本山荻舟

寛永十三年十一月、朝鮮の國使が來貢して三代將軍家光に、色々の獻上物をした中に、國産の生きた虎があつた。

江戸城内吹上の苑内で、將軍台覽の儀があるといふので、諸臣の登城した中に澤庵和尚や柳生但馬守も居た。

當年三十三歳潤達な家光は、正面廣縁の間近に座を定められ、一門諸臣はきら星の如く居流れてゐる。

やがて虎は檻のまゝ、園丁に護られて、おどそかに庭上に昇き据

ゑられた。丈は五尺にあまる大虎の逞しく肩をそびやかしたのがぐるぐると檻の内を歩き廻つて、折々牙をむき出すと嘯くやうに鼻を鳴らした。繪に描いた虎こそ見馴れて居るが、韓唐土に住むといふ虎をまのあたり生きながら見ることは珍しかつたのである。

黄色に黒の筋のある、美しい毛並を見入りながら、家光は左右を顧みた。

「性の猛きに似もやらず、美しい毛色ではないか、誰かあれを撫でて見る者はないか。但馬そちはどうぢやな。」

「はい、いかなる猛獸も、長く飼ひ置く時は、自然と人に馴れ親しみ、餌を遣はす者には仇はせぬと承り及びますが、遙々渡來したばかりで、迂濶には手出しはなりませんまい。」

と、老功の但馬守は當らずさはらずの答をした。

「そちは武藝の神といはるゝ名人ではないか、劍道の氣合を以て虎の威を挫くことは出来ぬか。」

「劍道の上でございましたら、或はなるかと存じますが、御前に於て年甲斐もなく、さやうな戲がましい事は御遠慮申し上げたうございます。」

「はて何の遠慮に及ばうぞ、又決して戲ではない。首尾よくしおほせるに於ては、日本國武藝の徳として、異國へまでもほまれではないか、改めてしかと申しつける。所望ぢや。」

さういはれると、但馬守も、もう辭退することは出来なかつた。

「上意なれば是非には及びませぬ。老年の氣力衰へ、さぞ、お目まだるい事とは存じますが、各方にも御免。」

と列座の諸侯へも一禮して、やをら席を立ちあがると、しやつきりと腰をのばした。右手には鐵扇を携へて居た。つかくと檻の前へ進むと、園丁に戸を開けることを命じた。園丁は氣遣つて、ちよいと朝鮮の使節の方を見た。言葉の通ぜぬ朝鮮使節はすましてゐた。

「氣遣ひには及ばぬ、早く開けよ。」

と家光が乗出して、せき立てた。豪氣の將軍は、但馬守が若しひるむやうな事でもあると、自ら其の場へ躍り出さうな氣勢を見せた。園丁は恐るゝ檻の鐵格子を開けた。虎は猛然として飛出さうとした。

其の入口にびたり立つて、鐵扇を正眼に構へた但馬守は、恐るゝ色もなくぬつと檻の中へ這入つた。滿座の者は唾を吞んで、何

れも手に汗を握つた。使臣は始めて眼を睜つた。

虎は大いに怒つて駱駝のやうに背を高く圓めながら、牙を磨いて躍りかゝらうとした。檻の中にはつむじ風が起るかと思はれた。但馬守は磐石の如くびくりともしなかつた。正眼につけた鐵扇は、澄渡つた水の流れる如く、つゝと進んで虎の目の前を壓した。

武藝の心得のある者は、何れもその尖端に鵝の毛ほどの隙も無い事を認めたが、畜生の淺ましさか、虎は一步尻込みしながら、猶首を振つていきり立つた。そして恐しいうなり聲を立てた。瞬きもせず睨みつけてゐた但馬守は、氣合をはかつて、つと一足踏出すと、殆ど稻妻のやうな速さで丁と虎の眉間を打つた。それは武藝の仕合に於て、相手の面上を碎けよとばかり打込むほ

どの強さではなかつた。

打つたのは殆ど型ばかりであつたが、虎は忽ち猫のやうになつて、目を怒らしたまゝ、首をぢぢめた。列座の面々は、あつといつて舌を卷いた。

但馬守はもう一度念を押すやうに、えいつと重ねて氣合をかけると、さしもの猛獸も前足を屈して床に頭をつけたまゝ、家畜のやうにひれふしたので、但馬守は始めてにつこり笑つて鐵扇をすつと手許に引くなり、悠然として檻を出た。

「あつばれであるぞ、但馬。武藝の神といはるゝだけある。」

と、家光は膝をたゝいて感歎した。最も驚きあきれたのは、無論朝鮮使臣であつた。

老年の但馬守は少しの誇る様子も無く、縁に上ると、寧ろ餘計な

腕立をきまりわるさうに平伏した。

「但馬殿、お手柄であつた。とそばから澤庵和尚が聲掛けた。

「老人の冷水、おはづかしうござる。」

と但馬守は苦笑しながら相變らず謙遜して首を垂れた。

「いや、上様仰せの通り、日本武藝の徳として、異國へまでも譽に相違ござらぬ。手前も長年の間、今日のやうな手並は始めて拜見致した。」

澤庵は心から感服したやうに雙手をあげて手柄をはやした。

其の様子を見た家光は一寸軽くうなづきながら、

「和尚、武藝の徳はあらはれたが佛法の徳はいかゞぢやな。」
と、なかばからかふやうにいつた。

「廣大無邊の徳を持たぬ、我等の分際と致しては覺束ないなが

ら、せめて馴らす位の事なら出来ようかと存じます。」

「なに、此の猛獸を馴らす事が出来るとか。」

「はて、馴らす位の事は猛獸使にも出来るかと申すこと、何の手柄にもなりませんまいが、功德の薄い我等としては、その位が關の山かと存ぜられますまでぢや。」

「面白い、佛法で馴らすことが出来たら、異國に對してもこの上の名譽はない、是非所望致したい。」

「たつて御所望とあれば一つ御目にかけてませう。お歴々衆も但馬殿にも御免下され」といふかと思ふと、衣の袖をしぼりもせず無造作に庭に下り立つた。つかくくと檻のそばへ行つて、手づから其の戸を引開けた。苑丁が驚いて支へようとしたけれども、其の時にもう澤庵の半身は檻の中へのぞいてゐた。

新しい闖入者を見ると、虎は再び怒りたけつて、一聲高く吼えりと眞紅の舌を上にとらして、鋸のやうな白い牙をむいた。併し澤庵は恐れる色もなく、にこ／＼笑ひながら兩足を踏み込むと、後ろへ向いて、自分から戸をしめて、始めて衣の袖をまくつた。まさか荒狂ふ猛獸を手捕りにするつもりでもあるまいと、並み居る人々は固唾かたづをのむよりも、寧ろあきれて目を圓くした。すぐにも飛びかゝると思はれた虎も、相手があまり大膽不敵なのに、氣を吞まれたとでもいふものか、再び背中を岩のやうにしてじり／＼と後じさりをした。袖をまくつた澤庵は、すこし前かゞみになつて、左の手を前へ引くと、かつと自分の唾を吐き掛けて、ついと虎の鼻先へ出した。すると、さしもの猛獸が、何と思つたか長い舌をのばして、其の手

のひらをべろくとなめた。

筆蹟
百年三萬六千
日、彌勒觀音幾
是非、是亦夢、
非亦夢、彌勒夢
觀音亦夢佛云應
作如是觀矣、
澤庵林老卒授筆

百年三萬六千
日彌勒觀音
幾是非是亦夢
非亦夢彌勒夢
觀音亦夢佛云
應作如是觀矣
澤庵林老卒授筆

澤庵 筆蹟 (東海寺所藏)

瞬きもせずじつと見て居た
但馬守は、ほつと溜息をつくど、
感に堪へて思はず頭を下げた。
家光を始め満座の諸侯があま
りの不思議にあつといつたま
ま、聲の出なかつたことは言ふ
までもない。
澤庵はすぐ手の掌を返して、我
が家の飼犬をでもあやすやう
に、虎の耳元を撫でてやると猛
獸がまた飼犬のやうに、ごろりと横に寝て嬉しさに戯れた。

「あは……。」と澤庵は頓狂な笑ひ聲を立てながら、子供のやうに股をひろげると、虎の上へ馬乗りになつて、

「但馬殿、この通りぢや。」といつた。

これより澤庵に對する家光の歸依が一層厚くなつた。
後に但馬守は家光から、その故を聞かれた時に、

「凡そ劍法の極意が禪と一致することは、常々申し上げてある通りでございます。武藝の氣合と申すものは、往々にして相撃となる恐がございます。よつて一瞬の間も心をゆるめる事は出来ませぬが、禪に徹底して、無念無想の境に達しまする時には、猛獸はおろか、如何なるものも、窺ふすきの無いものでございます。」但馬守は本當の心を飾らず詐らず答へた。

家光はまたそれを聞いて、澤庵に感心すると同時に、但馬守にも

感心した。さうして修養の結果が家光の心の糧となつて、自ら其の治世の上にも現れた事は勿論である。家光が後まで左右に語つて、

「余が天下の大政をあづかつてやゝその要領を得たのは、澤庵と但馬の賜だ」といはれた。

其の澤庵の爲に萬松山東海寺を品川に建立したのは、二年後の寛永十五年であつた。普請フシの時に將軍は、特に小堀遠州に命じて庭や茶室を築かせた。又自身屢、山門を叩いた。越えて七年正保二年十二月十一日、澤庵は七十三歳で東海寺に遷化した。それから半年も経たぬ翌三年三月二十六日には、但馬守が七十六歳で卒した。兩人の病中には、家光はまた自ら枕邊を見舞はれたのであつた。(宮本武藏)

小堀遠州
遠江守政一
宗甫と號す
茶道の宗匠

氷川

東京市赤坂區氷川町氷川神社の側に勝伯の邸があつた

勝海舟
名は安芳
海軍卿
樞密顧問官
伯爵
明治三十二年薨年七十七

三〇 氷川清話

勝海舟



勝安芳

世に處するにはどんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ何でも來い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ」といふ料簡で行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白がついて來て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうかうせればいかぬ。若し一度で出來

戊辰進撃日、三月十五日。蝸牛角上闘、轉瞬廿五年。皇國一大府、此中無幸民如何爲_レ焦上。思_レ之獨傷_レ神。八萬幕府士、罵_レ我爲_レ三大奸。知否奉天策、今見全都安。參軍勿_レ嗜_レ殺、嗜_レ殺全都空。我有_レ清野術、傲_レ魯挫_レ那翁。官軍逼_レ城日、知_レ我唯南洲。一朝誤_レ機事、百萬化_レ機。壬辰初夏、海舟勝安房

稱揚抑損

なければ何度でも出来る所までやり通す。兎角世間の人は、事業の成就する前には、や根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が成るに違ひない。三月廿七日、上野、開、猪、勝、日、廿、年、
 望月一之助、才、世、事、武、何、爲、其、上、田、獨、獨、功、事、
 心、事、幕、府、士、罵、我、爲、大、奸、惡、否、喜、天、策、今、見、全、都、安、
 參、軍、勿、嗜、殺、嗜、殺、全、都、空、我、有、清、野、術、
 傲、魯、挫、那、翁、官、軍、逼、城、日、知、我、唯、南、洲、
 一、朝、誤、機、事、百、萬、化、機、壬、辰、初、夏、
 海、舟、勝、安、房

出来ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝

(帖友亡) 蹟筆舟海勝

西郷南洲 名は隆盛 維新の功臣 陸軍大將 明治十年の役城山で自刃
 高輪の一談判 明治元年三月十四日芝區高輪田町薩摩藩邸に於て江戸城開渡の談判
 筆蹟 尊輪拜誦仕候陳は唯今田町迄御來駕被_レ成下一候段爲_レ御知_レ被_レ下早速罷出候様可_レ仕候間何卒御待居被_レ下度此旨御受迄如此御座候頓首 三月十四日 西郷吉之助 安房守様 拜復

高輪の一談判
 尊輪拜誦仕候陳は唯今田町迄御來駕被_レ成下一候段爲_レ御知_レ被_レ下早速罷出候様可_レ仕候間何卒御待居被_レ下度此旨御受迄如此御座候頓首
 三月十四日 西郷吉之助 安房守様 拜復

西郷南洲書翰(帖友亡)

膽を吐露しあふほどの知己が出来るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。こゝへいくと、西郷南洲などはどれ程大さかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。其の

ほりへり 女鳥ソネ

熊助
永田熊助
西郷家の従僕

度胸の大きいことには自分もほとく感心した。官軍が品川まで押寄せて来ていまにも江戸城へ攻入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷までその談判にやつて来た。當日、自分は羽織袴で馬に跨つて従者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内されて暫く待つて居ると、西郷は庭の方から古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊助といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来た。「これは遅刻しまして誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の様子はすこしも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈々談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挟まない。色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します」とかういふ

社稷の民のまゝの家
自分言ふこと、
社稷の民のまゝの家

桐野
名は利秋
陸軍少將
西南の役
西郷と共に城山
で自刃した

のだ。西郷のこの一言で江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出来、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、いや、貴様のいふ事は自家撞着だ。とか、言行不一致だ。とか、澤山の暴徒があつた通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。とか色々喧しく責立てるに違ない。さうなると談判は忽ち破裂だ。併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達観する明と大事に處する斷とをもつてゐた。談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間へ来て竊に様子を窺つて居る。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひしくと詰めかけて居る。實に殺氣陰々として物凄い程であつた。然るに西郷は泰然としてあたりの光景は少

しも眼に入らぬものゝ如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に押寄せて來たが、自分が西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣としての敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことは、いはゆる天空海濶で見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。知識の點に於ては或事柄は自分の方が上で外國の事情などは自分が話して聞かせた位だつたが、その氣膽の大きいことに至つては、絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。水川清話

三一 南洲遺訓

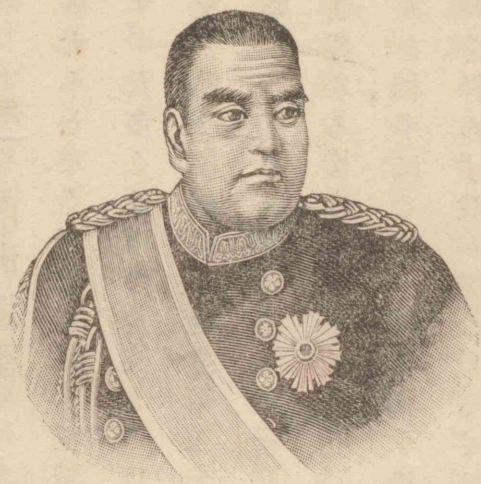
西郷南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は時宜次第工夫の出来る様に思へども、策略の煩屹度生じ、事必ず敗るゝ者ぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれども、先に行けば成功は早き者なり。

人を相手にせず。天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず我が誠の足らざるを尋ぬべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、

皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛すまじき者なり。過を改むるに自ら過てりと思ひつかば、それにてよし、その事を



西郷 隆盛

ば棄て、顧みず直ちに一步踏出すべし。過をくやしく思ひ、取締はんとて心配するは茶碗を割り、その缺を集め、合せ見ると同じ事にて詮なき事なり。

るものなり。この始末に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。命もいらす名もいらす、官位も金もいらぬ人は始末に困

曾我兄弟
十郎祐成
五郎時致

尾崎行雄
學堂と號す
政治家
衆議院議員
嘗て東京市長文
部大臣司法大臣
等に歴任した
安政六年(三三九)
生

道を行ふ者は天下舉つて毀るも足らずとせず、天下舉つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。

天下後世までも信仰悦服せらるゝものは只是一個の誠なり。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも後世必ず知己ある者なり。(日本陽明學派之哲學)

三 西郷南洲論

尾崎行雄

有史以來時を閱する幾千載所謂英雄豪傑も亦多し。或は名言

徳行を以て勝り、或は鴻業偉勳を以て勝る。而して皆能く多少の聲望を當世に繋ぎ、渴仰を後昆に得ざるは無し。而して其の聲望渴仰の深淺大小を較ぶるに、亦多く言行事業の大小深淺に伴ふものあるが如し。獨り我が西郷南洲に至つては古來の英豪と全く選を殊にし、徳望の隆洽なること遠く其の言行事業の上に出づるを見る。南洲の言行欽すべからざるに非ず、事業慕ふ可からざるにあらず。但其の言行事業は未だ彼が如き徳望を博するに値せざるを思ふ。余此の疑問を懷いて左思右考するもの多年、之を先輩に質し、之を史籍に稽へ、種々の方面より解釋を試みて遂に獲る所なし。竊かに以て憾となす。然るに偶然の感興は一朝にして倏ち多年の疑問を氷解せり。曾て東京市立養育院を巡視す。收容する所は皆是貧苦にして

自立すること能はざる者に係ると雖も、熟其の狀貌を視るに富貴の相を具へて爾く貧困なるべからざる者間、之あり。之を當局者に諮るに、果然彼等の中には高等官の職に在りし者あり、巨萬の富を擁せし者あり。然るに不期の變に遇ふに方りて直ちに養育院中の人となるは榮枯の變化亦激しからずや。人各親屬あり、故舊あり、艱難相濟ひ、變災相弔して、容易く凍餒の甚だしきに至らず。此の輩にして獨り艱難を濟ひ、變災を弔する親屬故舊なしといふは頗る奇とすべし。是に於てか謂へらく、墮落此の極に及ぶものは、其の身に固有の性癖ありて自ら不幸を招致するにあらざるなきを得んや」と。乃ち卒然として當局者に問うて曰く、入院者一般に通ずる特質と稱すべきものあらんか。若しこれあらば願はくは與り聞くを得ん」と。余は卒然として

疑問を發したりと雖も、翻つて又謂へらく、是蓋し深慮を要すべき大問題なり。當局者の經驗に豊かなるを以てすとも、或は直ちに答へ難からんと。而も當局者は聲に應じて答へて曰く、然り、洵に之あり。他人に對して同情を缺き、毫も自ら制抑すること能はざるもの、即ち一般に通ずる性癖なり」と。余は其の應答の甚だ速かなるに驚くと共に、一種の感興は油然として湧けり。而して之と同時に回憶したるものを西郷南洲とす。身高等官の位置に在りと雖も、家に巨萬の富を擁すと雖も、苟も他人に對して同情を缺き、獻身の熱誠なくんば、他人亦白眼を以て我を視る、一朝蹉跌に遭ひて凍餒するも亦顧みるものなき所以なり。畢竟社會は同情の交換を以て成る。知るべし、善惡の因、慶殃の果、應報の違はざること影の形に隨ふが如きものある

甲東 大久保利通
松菊 木戸孝允
藤 伊藤博文
隈 大隈重信
衆星北斗に
子曰爲レ政以レ德
譬如北辰居二其
所一而衆星共レ
之(論語)

を。社會は同情の交換を以て成立する所以を解し、同情を缺く者の遂に他の同情を買ふ能はざるを知らば、其の裏面に於て徳望の歸する、亦由つて來る所あるを推すべし。而して南洲の面目始めて鬚髯たるを得るに庶幾からんか。

之を維新の諸豪に視るに、南洲の果斷明決は甲東に如かず、謀慮周密は松菊に如かず、若しそれ學藝才辯に至つては藤隈二君に如かざること遠かるべし。而も挺然として群を抜き、望を負ふこと、猶衆星の北斗に共ふが如きものありしは何ぞや。征韓の議破れて急流勇退し、孤馬に鞭ちて帝都を去るも毫も怨嗟の風なく、悠々たる麀城の天、犬を追ひ、兔を獵して閑適自ら遣る。此の間誰か叛心を藏すと謂はん。若し眞に叛せんと欲せば、前に前原の變あり、江藤の亂あり、必ずしも丁丑の歳を待たざるなり。

前原の變

明治九年前原一誠が兵を救に擧げた事

江藤の亂

明治七年江藤新平が亂を佐賀に起した事

丁丑

明治十年

月照

京都清水寺の僧

忍向

勤王家

安政五年十一月十六日隆盛と共に薩摩の海に投じて死に隆盛は蘇生した

蘇生した

王莽

漢の僭主

況や重望彼が如きを以てして、干戈の外に施すべき方策なしと謂はんや。今に及ぶまで彼が叛跡を云々するは、未だ以て英雄の心事を解する者にあらず。彼固より行路の人に忍びざる情あり。況や多年艱苦を共にし、水火に出入し、愛子友弟に等しき配下に對するに於てをや。丁丑の死は即ち彼が是等の配下に捧げたる犠牲のみ。世或は月照の死に對して西郷を議するものありと雖も、余を以て之を見るに、唯其の跼天踏地の志士を憐む情に勝へず、之を救ふ道なきがため、自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず。漫りに揣摩臆測を逞しうして、種々の言議を挾むが如きは、英雄を以て兒女の情なしとするの妄に坐す。恭謙士に下る王莽も、或は以て一時の隆譽を博し得べし。人心の歸服を得んとして恩を施し、惠を加へ、強ひて笑を賣る者は、現

自分の心せいで
他の情を討つ
自分の物を以て
他の物を權衡

に吾人の目撃する所、而して遂に南洲の萬一を庶幾すること能はざるは、多く人工の假作に出でて性情の自然に基づかざればなり。塗粉は久しからずして剝落す、人工の假作は永く本來の面目を蔽ふ事を得んや。情熾なる時は智力或は其の作用を鈍らす。一度動いて同情の念に驅らるれば、天下の大事に關する軀を遺れて一故舊の爲に死を決し、百二都城の子弟に擁せられて、千載叛賊の名に甘んず。大局の打算を誤るを笑ふ勿れ、兒女の情に同じきを嘲る勿れ。南洲の南洲たる所以此に在りて、而して人の偉大なる所以亦實に此に存す。一々利益を計較し、得失を打算し、自我を立つるに専らならば、他人亦此の如くにして我に對せん。其の自ら衣食する能はざるに及んで、直ちに養育院中の人となる、亦怪しむに足らず。己を

澆季リセガ子人望の毒

無みし、軀を捐て、他人の爲に同情せば、學問才藝の取るに足るものなくとも、猶能く衆心を得るに足らん。畢竟人望は同情の反射なり。我より注ぐ者を同情といひ、他より返る者を人望といふ。もとこれ一物にして、二あるに非ず。偉大ならんことを欲せば、先づ其の仁心を修養するを要す。人の冷酷を怨み、世の澆季を歎じて、其の極社會の組織を非議する徒は、實に自ら省察するを急とすべし。余一日養育院に臨んで、偶然感興を催し、延いて南洲に關する多年の疑問を氷解し得たりと信ずるが故に記して少年子弟研鑽の料に資す。(讀賣新聞)

師範國文第一部用卷二終

師範國文第一部用卷二

文部省檢定

師範學校國語教科書 大正十五年三月十七日

大正十四年十月二十七日印
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十日訂正再版印刷
大正十五年三月十三日訂正再版發行

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
金四十三錢	金四十三錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢
金四十三錢	金四十三錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢	金三十九錢



編者 吉田彌平
發行所 東京市神田區通神保町六番地
印刷者 上原才一郎

發行所 光風館書店

(電話) 大手七三三〇番
(振替) 口座東京三二七番

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候は、直に御送附可致候

教員講習所 生徒

本科二年

岡岡 評



岡岡 評

Handwritten Japanese characters in cursive script, possibly reading "乱歩" (Rampo) and "清" (Kiyoshi).



麻
26
81

広島大学図書
2000053181
